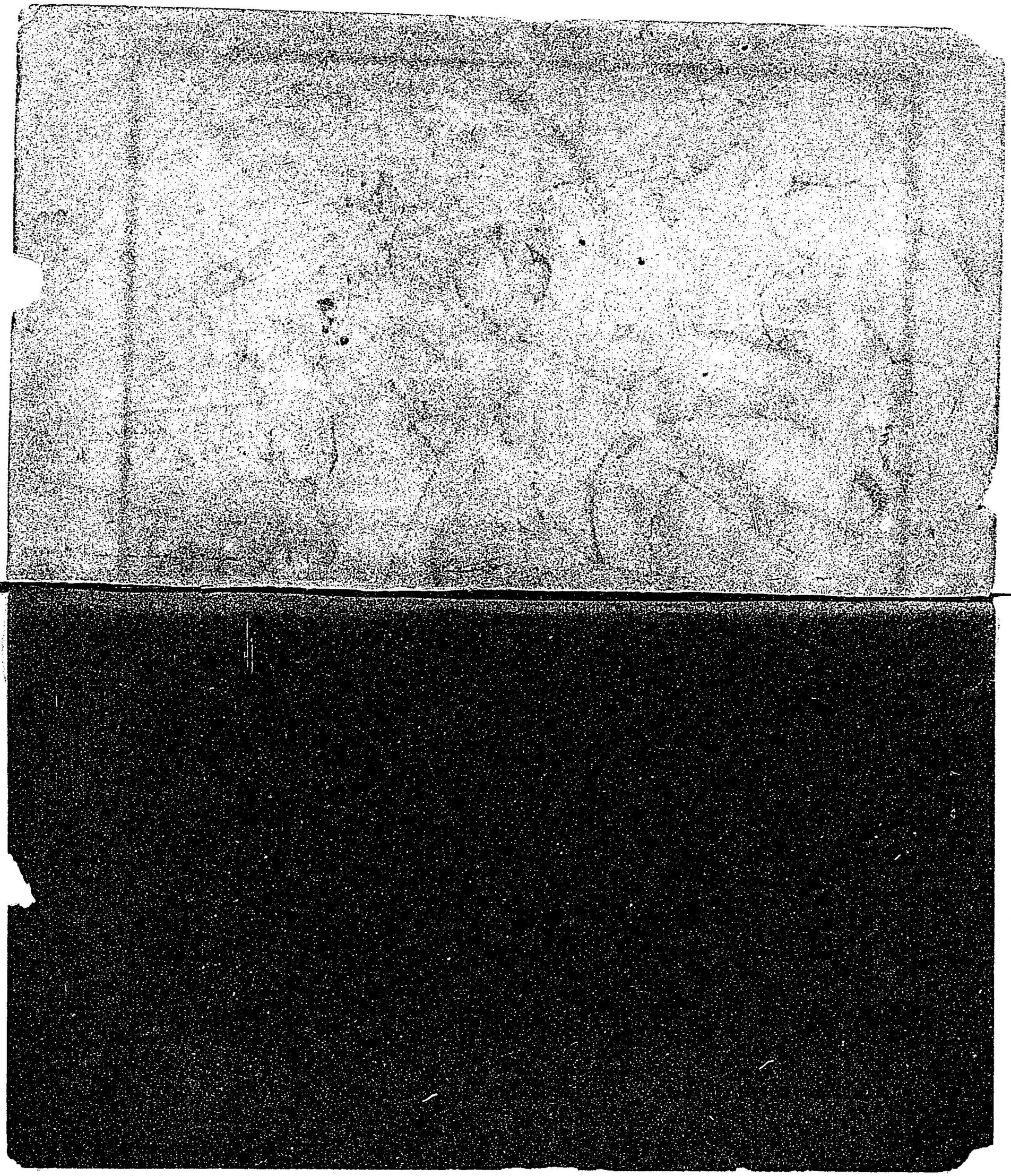
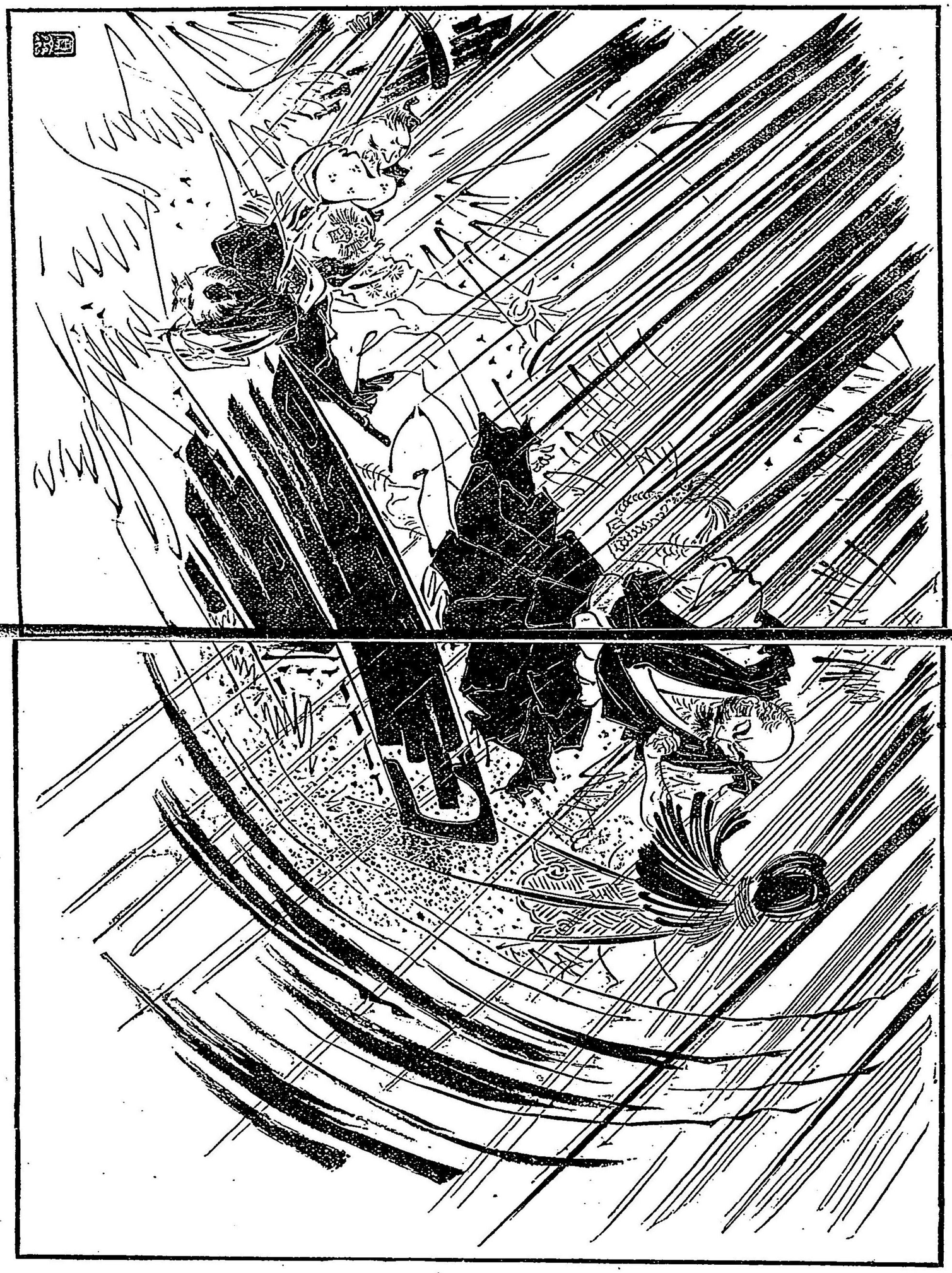
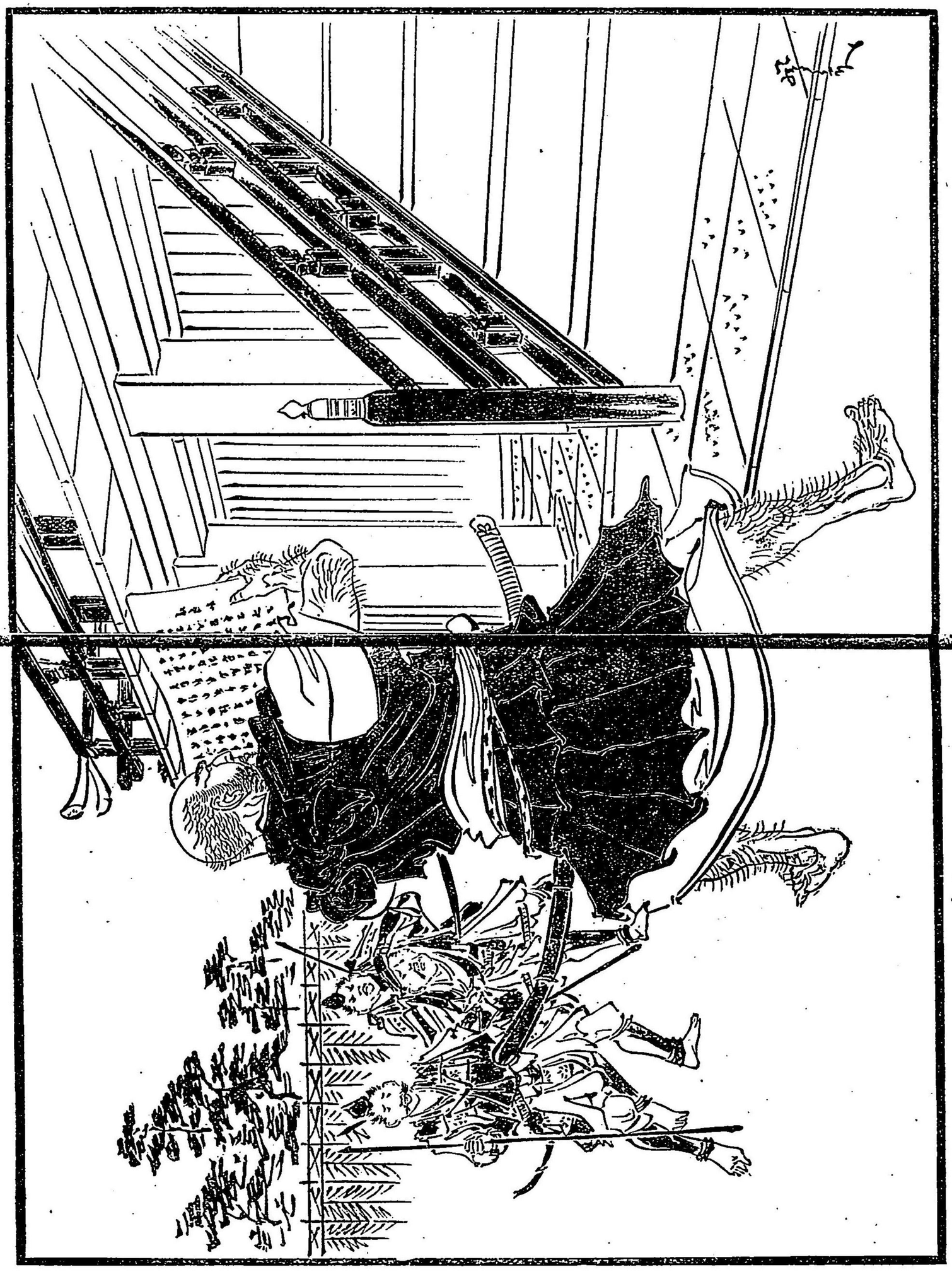
7922
文覺
實傳
松林伯知講演
今村次郎速記
遠藤武者盛遠



清ふ男女老若の助成を蒙むり文覽實傳を發行して二世安樂の天利を勸修せしめんとする勸進の狀

夫以れば先鞭能く勝を制するは社會の常理にして豈競馬競のみならんや、太閤は秀吉の爲ふ先んぜられ、權現は家康の爲ふ襲はれて他に珠の藉狸を冒すべからざるふ似たり、大菩薩の八幡は爲に先をれて觀音地藏も遜ふに其の餘光を得るの冥、是其の德望に依ると雖ども蓋し商人が版權若くは專賣の特許を得るが如く其の形ちは已にあるも後ると時は自づから權利を他ふ奪はる地藏觀世音の如きは然り、故ふ勸進帳は世に幾千もありと雖も其先鞭を據慶の爲ふ得られて殆んど餘ふ勸進帳の非ざるが如し、豈嘆ふはしきにあらずや、熟ら考





ふるに文覺上人が神護寺建立の勸進帳は其主眼とする所實に一寺寺の建立を留ら保して國家の紊亂を救ひ興さんが為なり然るに於て平本驛又先鞭を打て上人が實傳を發行す、元より坊主の傳記なれば其の心意は則ち丸儲けの一點にあり、況んや目下國洲が明治座の舞臺に演ずるに於てをや、一身滿腹の幸福を得る莫大の機を過すべからず、因て勸進修行の趣意を紀益し以て件の如し

明治廿九年六月

求光閣主人敬白

文覺實傳

遠藤武者盛遠

文覺實傳

松林伯知講演
会村次郎速記

第一席

天下騒に亂れんとする時は必ず忠臣豪傑現はれ出でまして之を救ふといふは今日までの宇内の狀態でおざい幷、法に説き起しまする處の講談は源平盛衰記を以て眼目と致しまする彼の文覺勸進帳の一條りでおざいまして即ち文覺といふ者の人、為孫樣かじめ講談いたしまする心算であります、成る人の曰、文覺は其の心定まらざる人物にして故を源氏に心を寄せ、又は平氏に心を寄せ、實に一心取りとまりれなき者なりと、是は文學者の人の心を知らざる人の評であるとも私しは考へます、如何とも是れは文覺は平氏に由緒ある人なるお員あり感ずる所あ

つて黒髮を絶ち武門を捨てゝ佛門に入り而して又佛門に歸依しておられたお王室の衰頽を憂ひ源氏の衰ろへたるを悲しみ平氏の專横を憎み殘存小島に已れ流刑の身となりしを哀はひ親朝を勸めて院宣を賜はる事を心に期し是が為ふ源氏一統の亡となり昨日までは地の果る如き都ひありし平氏も無惨や滅々の霜に遇へるが如き跡形もなく西海の波諸共に消へ行ました、其時に只殘る所の御代といへる平氏の遺人筑も源氏に於て殺害ん事する文覺は見るに忍び手此の命乞ひ筑なして又平氏の恩に力筑盡したといふ、誌を以て或る人は文覺の心は定めなきなど申したが知れませんなれども、私の見まる所にては文覺は外剛を現はして内に涙あるの真の英雄豪傑でありませらが、之筑俗に申せば惡僧と云ひ、或は俠客といひ、他人の衰ろへたるを見れば彼戦を論せず戦が身に擔へて是を救ふといふ濃

ばれ後来得ぬたきの人傑であります、併し内に涙あるといふ豪傑も其の始めには隨分惡逆の事多くありまして、此の文覺が流刑になりしも治承六年八月で御座います、扨是よりズツと閑ぶつて文覺は政立から忠義きに入る事と致します所此の文覺の父といふ者は雅であるが申すと元島羽の院北面北藤に達藤左近將監盛光といふ人がございました、此の盛光は波部氏にして北面の中にても弓矢の藝に達し、實に兼由の弓にも劣らず、深く鳥羽院の叡感に與ありしなどの人物でございます、扨此の盛光が年六十に及びました時に未だ子といふものがございません、耳順に達して子のないといふは實に人間の不幸此の上もなき事、若し子なき時は無論家系斷絶に及びます事ゆゑ、妻と計りましてどうか一人の子を欲けたいといふ、夫とも妻は盛光が見れば年も六十を下でおざいましても、まだ子の生れん

といふ事もたゞは事ゆゑ、乃は古への事で、神に願事をすれば必ら
ず子を授けるとか佛に誓へば子供を拵るといふ事を厚く世の
人が信じて居りまして、殊に大和國長谷寺の觀世音は靈驗明著
にして是に誓へは必らず一子を授け三ふとゆふ願を聞及びま
したゆゑふ夫婦長谷寺へ參り此の御佛を祈りて、あはれ男子を
は授けさせ玉へといふて一心に誓願いたしました、扨も盛光夫
婦は七日七夜の間斗籠りを歌して一心不亂に願ひを上て居り
ますると丁度滿願の夜の明なんとする頃、忽然として紫雲たな
びき渡りしが中に一人の僧侶の姿一枚を携へて來るを言ず
遠慮盛光の妻の懷へ之を入ました、盛光の妻女、アワをいふ自ら
揚し祭に器き覺は是一時の夢 妻 貴所今私しの懷へ一人は僧が
寄の姿一枚を入たる夢を見まして御座い升 盛光も 夫 ヨー然ら
でありしが、今然雲たなびくと見はつるお怪しき僧の出でゝ

の姿を其方は懷ところへ入れたりと思へは我も夢覺たり 妻 夫で
は貴所も其の夢を 盛 ヲ同じ夢を見たるは不思議、夢は五臓の勞
れとはいへど斯る奇異の夢をは夫婦同時に見るといふは正し
く是れ觀世音の利益を我々夫婦の身に授け玉せ玉ふるならん
大願成就疑ひなし」と打喜こんで立歸りました、所が其の月よ
り妻女は懷胎を致しましたら盛光の喜び如何はかり先づ
〈身体を大切にと厚く手當をして居る中に早や臨月に相成
ました、其の時分の苦ゆゑ只今のやうな産婆おある譯でもなど
いません、ボロの筵を敷く低ゐの事で、處が此の妻女は四千三の
初産でれまけに苦らく重いのでありますから、たつての苦しみ
を致して漸やく産み落しては男子でどざい升、其の喜びに引續
て妻女は難産の場に苦痛一方ならず、其頃は僧侶お醫者の真似
を致したが僧を頼んで介抱手當をして貰つたお其は甲要も

なく絶に空しく相成りました、盛先は之を見て涙を流し盛「アヽ我れ家の絶なんを憂ひ親世者に無理の願ひを籠め奈ひ得がたき子は得たるも夫が為先に真節の妻を失ふよ悲しさよ、さはあれ生れしは男の子、奥様ながらも滑稽ましく眼鉤ぜく見つるは適をれ後に名を残す英傑男子となられんも知れず、妻を亡なふ今日の悲去みも後の却つて楽しみと心を強く盛先は妻の佛事を営なみ小兒の名を一童丸と名けて夫より後は只管と子の養育をいたされました、然るに一童丸三才の時父盛先も此の世を去り孤家孤獨の身に上となりしを丹波岡保庄の庄の下司春木入道道善といふ者盛先が妻の一族なるが故に其の子を引取りましたが頻が真黒でどざいますから誰いふとなく黒童丸と云ひ、アノ黒童が〳〵といつて本名を呼ぶ者がなく周より減慢一称に育てられた事ゆえ其の暴れといふ者は剛しい、子供には何

處この愛のあるものでありますが一童丸少しも愛嬌も何もなく兇険に朋守なく耳や八丈に相成りまして、金よ悪戯を暴り度内の田畑を踏みあらし成は立木を伐り、村々は小兒を大勢集めて相撲を取るに誰一人として一童丸に敵ふ者なく其の力量の如く十六十八位の男をも投げ倒すといふ一童丸の悪戯は一通りではありませんゆえ中には之れ怒つて○「ヤイ一童丸孫のやうな悪いは奴はないぞ来角力取りをしたり村内を荒す時には命を取るから然う思へ」と云ひますると一「アイ私が悪戯をした様ではない、私は悪いは事はしたいが外の者がしたのだと此らいつて居て、迚も奴め三、能く然んな事をいやアがる、良し金よ悪戯して欲奴等を懲ろかし」笑れんと真夜中に密と忍び出で竹掉を持て彼乃此言をいひたる者の田畑へ来り鍬乗などの穂を打取り一次二次の所を怨まちの間に荒もて帰り、為に損害を被むる事

実大であるから村内の者も恐れて一盗丸に口を聞くべからず恐ろしき怪童と誰も相手にする者も無い筈なり、其の代り剛気活潑必らず賜に驚ろくといふ事なく、夜中只一人獨歩して深山に入り更に恐ろしと思はせず、又は流れ凄く主ありといつて入の恐れて入らざる淵へ身をおどらして飛び入り其の底を探り来るなど其のなす所人の及ばざるのみ、常に子供等集めて己れ鬼大将となり戦争の真似を致し小兒の口に縄を噛ませて馬とし自分から之に打乗て右往左往に走らせ少しにても怠たる者は鞭を上て之を打ち、又廣き野に到れば牛を放つて其牛へ其の代りに打跨がり大勢の者に乾かせて、サア歩行け〳〵と責める、牛迷惑して中々遠く歩行ん、ス乗と怒つて「サア一同駆るに及ばん歩行んに於ては我れ一人にて歩行せて見せる」と鞭を深山取り集めて牛の尻へ結ひ付けて其へ火を放すから何か大怒の牛である

堪つたものでない、ドヒ〳〵走る、「どうか大都の手を掛るに成ばんざらう」と諦るを見て大都の子供も手を打て騒ぐ或は馬のつないであるのを見ると松葉筒以て鼻をふすべ馬を無暗に走らし空人を困らせるなど其の悪戯一通りならず、遠近の人も實に持て餘して居る、是に依て縣庁の役人の春木入道も大きに困り、どうも此のやうな亂暴者を村に置いては仕方がないが何らした宜ら宜ら宜と思つて居ると、常に京都西門院の北面に遠藤瀧口遠光といふ者があります、是は一童丸の伯父でございますから其處へ春木入道が頼み「どうも私の姪へ置ては實に仕方が無いから少しは都へ出して人の様を見せたなら種義作法も覚ねるであらう學問をも空せたら稽古おふもなるであらうゆゑ宮が黄嚴方へ預かつて呉れ玉はれ」といはれて遠藤遠光も頻の事ゆゑ忘れたとも言ひ難れ「然らばお預かり申すでござらう」

一童九千才此時に已れの家に引取りまして學問武藝を仕込ませまする之學問は餘里坊みはせんお武藝は實に好む所であります。から弓馬打物等も巧みに三四年の中に上達されの達人となり千四才の時に元服をして遠藤武者盛遠と改名をいたし千五才の時より朝廷に仕へ北面の武士と相成りましたお盛遠力量ある上に大膽不敵何事に寄らず己れの思ひし事は火に入り水に入り星でも遂ずといふ事なく人々是に驚ろかざる者はおざいません、此の遠藤武者盛遠お千八才に相成りし時圖らずも色情の落に其の身を過まつといふ條りは次回に辯じます。

第二席

名にしおふ京都嵐山は大堰の川を前に見て數百の櫻枝を連れて繁茂り其風景得も云はれざるほど立るに春の花夏の涼英は又格別、中にも櫻花咲き揃へる頃の賑はひは一方ならねども此

戸の鵜島山などゝ遠つて櫻の許にて酒飲む者の出来ざる場所でございます、盛遠は今日も此山に花を觀んとて来り、設けある腰掛茶屋に腰を掛け酒酌んで居る此の川を隔つて慢慢張り酒酌み交して居る者は是れ何れの人々なるか、平家の方々には源氏に名を揚し武士にや多くの女蔦達も居る孫子、遠藤武者盛遠之を眺めて居る處へ何れより出で来りしか一人の醉漢慢張を開いて彼の女蔦達の居る處へ突然り踏み込み行んとする者あり、遠は狼藉なりソレ者共召捕れよと下知の許より多くの侍組み掛かると雖ども中々以て及ぶべきかは、三人五人を投げ倒し今も慢張の中へ進み入らんず有様なり、此れ時遠藤盛遠見羅れたれは逸散に其の所へ馳せ来り盛コハ無禮なる醉狂漢かなゝと云ひたから襟髮取てウンとはかりに差揚げ盛アイヤ是なる處の人々よ怪ちず心配し玉ふな、我れ見参らすに平家御一門

の方々と思はる、是なる酔漢餘りの無禮を見るに堪へず以後の懲しめ斯の如くになし呉れん、人々夫にて見候屋と前なる大堰川へザブ〻はかり投込んだり、何か酔どれでも川の中へ投込れては酔醒の水の旨きといつて居る所でない、其の者は生死の境も計りがたい、慢然の中の人々之を見て、アノ壯士は何者なるか適ばれ迂者よとドツと聲を上て感じ合ひ、遠り近所に之を見たる者も其の強男に驚ろぎる者なく、中に盛遠を知る者あつて、眼れとろと亜にも稀なる大力者遠藤武者盛遠なりとはひしより忽まち夫るら夫面と言ひ傳へ是より盛遠の名は金よ高く相成りました、扨も遠藤盛遠に於ては千八才の折柄に圖らずも一の孫娘を其の身に引起したといふ其の事の源は茲に摂州渡辺橋といふは國内第一は大橋にして浪花大江の岸に掛り長さ二百六十六間、朝廷より掛られたる橋なるが折しも三月の中旬

渡り初の橋供養式行なはれるに就まして、近國より老若男女村集まり實に混雑一方ならぬ事ゆゑに禁裏よりは警固の為め遠藤武者盛遠に此の役式命ぜらるましたから下僕雑人共を引連れて渡辺橋へと来込み来る、盛遠其の日の扮装は、紺熟濃の直垂に黒糸縅の鎧を着け折烏帽子を頂だき銀の鍬巻したる長刀を脇挟み橋の上にあつて夫々下知を致して居りまする、雑人原は那方此方に馳は廻り群集なせる老若を警固致して居りまする此時南北橋詰の両岸には川に添ふて数百軒の掛茶屋を掛け数萬人の見物を是にあり、然る後に畢り皆々掛茶屋をは下りまする其の中に北岸の橋より東へ三軒目の掛茶屋より手の頃十七八はかりの女房の数多の女と共に掛茶屋を下りるを見るとも入除れて落はしく青鎧の有の遊りいとけだかく丹花の唇愛々しく緑の髪に雲の顔色、いろ〳〵の花盞し染たる紙ぎの簪を手に持ち添へ

川風に袖吹き返されじと衣の手に小袖を取り掻敷の褄子より下り来る想れあやぶみたる處の有様、何と此へんやうもなし、側へにある人に問いふたる時の笑窪、深からず浅からず元分の顔色あつて十二分の愛嬌あり、人をして此の婦人を心定めて見しならば必らずや見惚をしやうといふ世にも稀なる美人、遠慮盛遠つく〳〵と之を眺め、アヽ世にも不思議なる女子のある者哉、我生涯まじ月宮殿乃月城の假ふ人と化して此處に来りしかと疑るゝばかり有る美女を見し事なし豈人間界の人になるに、川風の為めに吹き送る衣類の香の薫り盛遠の身へブーひと来つたゆゑ魂しゐ忽ち肉体を離れ空中にヒラ〳〵と飛び去るかと思ふばかり、流石の盛遠今は生て居るといふ名のみにてアヤ美くしや、人間にはよもあるまじ、是ぞ西施が再来なるか親音菩薩の御新工か、そもにても何人の妻なるか、知る人を

持たる人とろ一生の果報なり、羨やましき事よと嫉を著やしまゝ花盛の婦人の橋を渡り行く後ろ姿に見惚て居りましたが餘り宜い様ではありません、何れの者か跡尾て見んと思へども已れ警固の役人なれば行くは出来ず下部を呼び「コレ家来アノ機敏より降たる婦人の跡を尾いて行け」「何處まで尾て参ります」「何處だか分ちん近くは近江、伊賀、伊勢、遠くは備前、備後假令何處なりとも程て見届けて参れ」「ハヽ」と四月掛るとも仔細はない何者の妻なるか取糺して参れ」「ハヽ」と一切何なる御用でもありますので」「盛」「何の用でも宜い、遠く跡を付け参れ」「畏こまりました」と下僕は大変の事とは思つたが盛遠の云ひ附け難に幾程か金を賞ひましたから跡を尾て参りましたが程なく立帰つて酸の婦人は渡邊左衛門直殿の奥方袈裟御前と申さるゝ御方に空汚でどざい外「盛」「ウーム扨は酸はろ袈

袋にてあるか然ちば孫は衣川と定めし申すであちなた下「左衛門」仰せの如く都に隠れ居る五人の指に折れたる白拍子衣川の娘にて敵の婦人も一度び白拍子に相成しを宜殿根引いたされしを聞むき盛「ハヽア左様かしテ衣川は當時何れに住み致して居るか承るまでもなしか下「されば其今は北嵯峨野に住あいたし宜殿より月々の賄ひ隠居同様の暮分と承たまはりましてどざい弁」と聞て盛遠大ひに驚ろきました、扨衣川といふ婦人は奥州衣川の生れにて容色類なく、管絃の道も拙なおち子、筑紫琴はとりわけ名悲、都へ上り白拍子の中にも分て勝れし者なりしを盛遠の父盛光の親戚にて渡邊某しと申す者聞く、契り両人の間夙翠けしは則はち袈裟、盛遠の為には伯母なり従弟なり其乃縁合を以て盛遠の三才、袈裟は一つ違ひにて二才の祈行末は夫婦になさんと許嫁せしか其年盛光は死去し盛遠の一童丸は春永入道才

へ引取られ夫よりは絶て双方ともに行来せし事もなく、盛遠聞心知りてより衣川といへる伯母ある事、其子袈裟と許嫁なる事を人より聞しに元来是まで女子などに心を寄る男にあらざりしと又袈裟が新ら美人なるを知らず曾て彷づれし事さへなかりし、扨方は衣川に於ては夫渡邊某し死去し手當に貧ひし金子も手薄になりしより娘袈裟の容色抜に勝れ殊さら諸藝に通ぜしものから十五才の砌り白拍子に致しました、袈裟は其の貌の名を東女といひしか衣川の娘由君人綽名して袈裟と申せしその李今下郡の孫を聞き盛遠は打驚ろいて何か思慮の体なりしかの其の日を役目を首尾よく勤め帰宅なしても忘るゝ間なく千々に心を痛めつゝ彼は祇か許嫁の妻なるを如何に打絶に隔れりし中ともなりしにもせよ一應の沙汰もなく殊には又人もあらんに同お渡邊宛なる左衛門宜へ遣はすとは人もなげなる衣川

の擧動、又宜しくて左の如く戒めこゝとは義して知つても居らんあ
戒を出し拔き手活の花と聚むるとは餘りといへば西暗し用ら
ろあれや盛遠は怒りに任せて嗟嘆野なる衣川の門邊へ來り樂
内を申込み召使ひの者に捕なはれ家間へ通つて待て居る所へ
盃出でる衣川盛りは少し過ぎられど、まだ香の殘る焼ぎくら
盛遠見るよ星「盛」是れは伯母上ふて候が、其もは盛光の眸一変れ
家當時遠藤武者盛遠でどぞる衣「ヲー孫しや盛遠どの聚光の折
ふ見たるのみ其後は絶て者沙汰もなかりしお大層成長をしや
つたな」成長をした所ろお身の丈七尺五寸の鐵面半皮「衣」御身も
奥とは伯母甥でありながら盛光大入の死去りしより反ひに隔
たり今日までも遇はで過去に茫然に尋られしは何が用事の
起りてか「盛」されは其もし今日突然参りしは餘の儀にあらず伯母
上へ對し、相頼み參き事の候お如何に承知致して下さるよう「衣」

遠は改たまつたる御詞如何なる用事に候が解り兼く夫に於て
陳べ玉へ承るまはるでどぞりませう「盛」イヤ遠綱には申すまし
大丈夫たるべき者一度ひ申出し聞入れられざる時は武士道の
すたり、弓矢の神に誓つて赤りし其し「衣」是は又行々しき御詞如
何なる事か知られども此身に叶ひし事なりせは承知いたし申
すべし「盛」然らは拙者の願ひの筋を申入れん、御邊の娘聚嬢御前
父と伯母との約束なれは我等お遠にいたし度し申受けに参つ
たり「衣」是はしたり何事かと存ぜしに思ひも寄らぬ其の言葉、我
お手許にあるなりせは直ちに承知もいたすべきが、今を去る事
二ヶ年前他へ縁附し事ゆゑに此義はかりは免し玉へ「盛」アイヤ
伯母上他へ嫁附しといふ事は御身の語を待たずして我れ疾く
之を承知せり然に夫は同族なる直にて候はん「衣」されは御身の
いふ如く御身と聚嬢とは許嫁にありし所其後互ひに打絶て今

は破縁同縁空なり殊に我が身先年病の床ふ卧し朝夕煙りも立ぬるを娘が嘱預せられたる左衛門殿に安分の恩みに預ろり其の恩にとり強ての所望夫ゆゑ餘義なく違はしたり盛イヤさはかりの事あらは何故其しには申入れ玉はざる、假令疎遠となるまでも未だ約束は解かぞろに一應の断りもなく金の為に眼くらみ直の方に遣はせしとあつては金よ我が一分の相立たず是非に直より取戻し其しへ申受けたし衣「是をしたり聞分けなきも程のある、假令如何なる約束ありとも已に他へ嫁附しを取戻去て御身に送る左る無法は出来不申盛イヤ無法にはあ座ず只武士の意氣地ゆゑ申受んと存ずるなり、聞入れずんは是非に及はず、御身と左衛門夫婦を切て落し我も共々冥途の道連れ覚悟いたせ」といふより早く一刀ズラリ抜放し衣川の咽喉の邊り へ突當んと云す衣「アヽ哥は去徒ち玉へ、心を静め聞の道理を能く

思ひ候へかし、御身は定めし信義あらん只一朝の怒りに任せ左衛門夫婦を討取り我を討ち其々御身も死なんといふは大丈夫の致す事ふてはよもあるまし其の上御身は禁喪奉行といふ大切なる御役をも勤めながら一婦人の色に迷ひ天恩を忘れ君へ不忠家を失なへは先祖への不孝盛イヤ姫はかりの道理を知らぬ拙者ふもあらず然りとても如何なる前世の悪縁か前日故が涙を見るより魂しい天外に飛び不忠不孝も更に厭はず、其の上盛遠出る一婦の色香に迷ひ命を捨て去て思かなりと笑はで笑へ、我が決心は動らすべからず否や返事を聞まゐらせ候ふ盛イヤ姫はかりの道理を能く聞きつけて飛び出ん勢ほ色ふ衣川は何といふべ紀詞もなく新し呆れてありしが頓あつて衣「如何に盛遠どの空までに思ひ玉ふのを打捨ても置れまじさりとて未ある娘おん身に遣はす事は出来ず今夜は何とか申入れ娘を我が家へ呼び寄せて酒

宴の對手致さすれば御身の一分も相立ち申さん其の上にて娘の事は思ひ綿らめ豆を怨む心留まり玉ふとあらば親の身として貞女の道を破らするは道にはあられど數多の人の命を救ふ其任場には代へがたし其をしも聞玉はずは最早此身は覚悟いたして候突とも切るとも致し玉へ」とおきロ説て聞へければ盛遠ツコリ打笑て盛遠を呼じけなき伯母上の御詞一夜の契りだに許し玉はで向後斯る難題を申すまじ衣ーリー然らば御身も承知なせしあ妻間のほどは人目も繁く候ゆ為今夜慕れて来玉へかし盛如何にも承知いたしてどぞる必らず抜はり玉ふな」と打言とんで帰られました

第三席

叔母跡に残りし衣川は盛遠とは一度び許嫁せし娘の妻、頭りに迫られ止む事を得ず今夜遇はせる事に受合ふしの如何に致し

て遇はせんと思案を周らしやう〳〵と認たあしつ通娘の方へ遣はしましたし、袈裟は母の書面を開封なし始終を読み下せば此ほど風の心地にて打臥せしおさまでの事にもあらざれども便り少なき我が身也左衛門殿に暇を申受け直ちに来り奚れるやうにと細々とこと認ゆあたり、元来孝女の事ゆ為に直そまま丈度を整のへ夫直は来た戻らず五帰りたは母の病気見舞に参りし趣むきを組く傳へよと侍女に言び附け僕を供に母れ住ゐに来りやおて一間へ遣入り袈裟モシ母上孫先刻は細々との御手紙拝見いたし取り急いで伺ひましたお御見受け申せはさまでれやつれの様子もなく如何遊はしましたのでどぞいます衣ーリー娘でありしが直ちに参られ嬉しら存ず夫に付御身に申す事のあり此方へ来玉へと奥の一間へ誘なはれ、密かる娘の其の前へ取出したる守り刀衣ー如何にや娘此守り刀を以て我を殺し

三はれ」といふかと思へばいふ〳〵と涙を流す有様、袈裟は大音に泣いて「盛遠よ何事に候や如何なる譯にて斯る御振舞、妾には更に合點お参り申さず国おかせ玉へと進寄顔、泣く〳〵眺め衣「如何にも様子いそれは御身の不審尤とも千萬、餘の義には候はず先刻遠藤武者盛遠仕参られ云々新参此々いふ否といはれぬ其の品理は一度び敵と御身堂は御嫁せし妻もあれど兜角に思妻荒々しく御身も心ふ楽まざる様子ゆゑ其儘にして打過せ去を御身を一度び盛遠の振間見しより先にも陳べたる如く風入れずんは数多の人の命に拘はる夫といひ是といひ餘義なき譯ゆゑ云々と申して帰せしなれど今つら〳〵考ふるに如何に数妻の人の為にもせよ標を守れといふところ拝の勤め、夫我操を破つて二人の男子に假令一度なりとも枕列べよ空いふ妻何で数へられべき、是に依り我れ先づ死なんと存ずるなり、殺し玉はれ

し娘」と又さめ〳〵と泣ければ袈裟は餘りの妻に涙も出でず給ふべき詞もなく茫然としてあつたりしが拝は又衣「如何にや娘御殺手を下空ずんは妻は自から刃に依空ん」と取上たる短刀を已れが咽喉に貫ぬかんといたす我胸め袈「アヽ待玉る拝上様、妻を殺して何ぞ致き空、孝行をしたければこそ、長の間悲しいつ程い勤めいたし候、妻操を能まで守らんとせば拝様の御為ならず其上良人の一命にも拘はるべき一大事今夜一夜は御留家に打伏し敵の人に面会なし勝の道理を申入れ思ひ留まり貰はゞと様々拝を説めし上下僕には拝の病ひの看護の為め今夜は夜伽いたすべし委細は明日立帰り申上んと我夫に願ふ必ず疑れよと云ひ附て下僕は其儘立帰す此方は遠藤盛遠は湯殿掃除なども為し派手なる衣裳を着用致し衣川の方へ来ると早速衣川は袈裟の二室へ誘ひ娘の袈裟に引合せ誠て用意の酒肴を取出だし

其の身は首から酌いたし越酔なせし折柄に衣如何に盛遠明日天御目に懸るべし後々休息いたし玉へ」盛遠は先刻よりの大酔に舌も廻らぬはろり聲イヤ伯孫上添じけなら存ずる、此の恩決して忘却いたさまじ有難し〳〵然らば御免蒙へとて袈裟と諸共一室へとろは這入られました、實に憐れなる袈裟御前遠藤武者盛遠に思はれし為め心ならずも操を破つて操を立てんと致せども其の身を汚されしお美人不安とは是等を申す事でありませう、扨翌日互ひに激ひ涙手をいたし袈裟は孫、盛遠に別れを告げ立戻らん空致せし時盛遠待玉へ袈裟御前、云ふべき事の残りたり袈「如何なる御用程か承たまはるでおざりませう」「されはなり遇はぬ者を遇はぬであるべき、弓矢取る身に生れ一度び思ひ染め一夜の情に嬉ろりし其の人お又他の人の眺めもなるや思へはいとゝ無念でどざる袈是はしたり餘りといへ

は聞分けたし、孫と御身と約せしに昨の一夜で妾の事は思ひ絶ら玉ふといはれし言葉をよも御忘れはあるまじ盛如何にも一旦は然約せしも此上御身の情を忘れおたし新く執念く思はれしは和御前の因果、直の因果斯く申す巡遠の因果三つの因果が一つになつたら是より直ちに直を殺し和御前も手に掛け我も共に腹掻切て相果べし」と泣たまはる望し袈裟御前は驚く孫を諭々に云ひ宥め奥の一間へ妾はして孫を宥め袈如何に盛遠ぬし夫ほどまでに妾の事を思ひ玉はる云さよ、真実は両夫に見にずといへる歌へと国なおら孫は孫お身お直の方へ参りしは、故の人無理に誘出ひしお故にして国とり妾の好まぬ所、其上なる程お夫直は此ほどより密かに云ひ交せし文子の出来しか度々歩みを運び誠には幸きなどは祈々見せ申すに依り……盛すと、御身如き美婦を持なおら、アノ直お好に云ひ交せ去婦人のあ

りて其方へ通ふとな、暗くき敵が振舞、斯る者に様を立る事やあらん今よりは我れと縁しを結び玉へ」と其御言葉が信實とあらば夫豆を七きめのにし肴れて夫婦ふたり申さん」盛「這は嬉しき事を聞くめの哉、如何にも承知いたしたり、速やかに祝儀切て除さん」と「オー、御身の腕前無て暫に聞、侍りしお夫豆も勝れし腕前尋常の除頂いたし若し過ちありて叶はず良し過たずとも此の事世間へ聞ねば互ひの身の上悪かりなん妻は本夜聖を洗ひ銘まで夫に酒を強ひつけ高楼に南北に寝かすべし、四更の鐘の鳴る頃に裏手の竹垣の内切戸より忍び玉へ、南表の様側の雨戸就朋くやうになし置べし是より廊下に入り高楼に掛たる階子を傳はり上り玉はゞ片新戸の開きあり、之を押し玉はゞ直ちに明き申すべし盛「ウム、如何にも承知いたしたり、シテ定光し座敷を暗かり、灯火の用意は如何に」「イヤ〳〵明火は點し申

すまじ、夫の居るべき其の所へ芋環の糸を便りにおん出で推へ、除りにはづんで通まち玉ふな」盛「いふにや及ぶ豆如き者、何とて忘ろき申さん御身相圖をな遂へ玉ふな」袈「如何にも承知いたしたさりとて坪上には夢々此事告げ玉ふな申入れゝは夫豆へ告もるせん」盛「心得たり然らば袈裟御前袈盛達孫逸す〳〵も通ま、ち玉ふな」と言葉をつがへて立別ました、往古は男子とも一月に一度位ゝは必ず髪を洗ふ事になつて居りました只今でも片田舎へ赴ると婦人月水の後髪なぞを洗ふ所があるさうで、其の名殘にや都會に於ても婦人の髪を洗ひし、を見れば御髪をお洗ひなすつておめで度らどぎいますなどゝいふ言葉が殘つて居ります又古へは髪を洗へは產土神を祭り酒盛を致すといふお例のやうになつて居りましたさらで這は男女ともに暗なみの一ツと致してあるまました只今では男子は散髪ゆ君朝夕洗ふ

りて其方へ通ふとな、暗くき故が振舞、新る者に標を立る事や
あらん今よりは我れと縁しを結び玉へ」其御言葉が信實とあ
らば夫宜を七きものにし膚れて夫婦ふなり申さん」盛「這は嬉し
き事を聞くもの哉、如何にも承知いたしたり、速やかに故切て
故さん殺オー、御身の腕前無て時に聞持りしお夫宜も隙れし腕
前尋常の除預いたし若し過ちありて叶はず良し過たずとも
此の事世間へ聞にたは互ひの名の上惡かりなん妾は今夜髪を
洗ひ飾まで夫に酒を強ひつけ高樓に南枕に寐かすべし、四更の
鐘の鳴る頃に裏手の竹垣の内切戸より忍び玉へ、南表の樣子の
雨戸我開くやうになし置べし是より廊下に入り高樓に掛たる
階子を傳はり至上り玉はで片折戸の開きあり、之を押し玉はで
直ちに明き申すべし」盛「ウム、如何にも承知いたしたり、シテ定光
し度數は暗かり、町火の用意は如何に」殺「イヤ〳〵明火は點し申

すまじ、夫の居るべき其の所へ等環の糸を便りにおん出で雁へ、
餘りにはづんで通まち玉ふな」盛「いふにや及ぶ宜如き者、何そて
遲ろき申さん御身相圖をな遠へ玉ふな」殺「如何にも承知いたし
たりとて琴上には夢々近寄給ふな申入れしは夫宜へ告げ玉ふな申入れしは夫宜へ告
もるせん」盛「心得たり然らば殺御身殺盛遠孫返す〳〵も通ま、
ち玉ふな」と言葉をつがへて立別ました、往古は男女とも一月
に一度法ふを必ず髪を洗ふ事になつて居りました只今でも
片田舎へ参ると婦人月水の後髪なぞを洗ふ所があるさうで、其
の名殘にや都會に於ても婦人の髪を洗ひし見れば御髪をお
洗ひなすつておめで度うどざいますなどゝいふ言葉が殘つて
居ります又古へは髪を洗へば產土神を祭り酒盛を致すといふ
お例のやうになつて居りましたさらで這は男女ともに嗜なみ
の一つと致して有ました只今では男子は散髪ゆ為朝夕洗ふ

事も出来減に伯耆のものでどざい弁舌話は叔置左衛門直の家
袈裟の立戻りしとより何となく憂ひを含んで居る様子直如何に
袈裟是は誠に有難き御尋れ、空まで
の事にはあらざれども便り少なき者ゆゑに兎角に力を落されて
まする直夫承たまはりて安堵いたし候ならば今夜聊さか酒を
賜きん為め一酌催をすであらう、御身も支度を致し候へ袈裟
髪を洗ひ申さんと存ぜし所直ヲヽ、左様であるか夫も宜しからう
んとて帯の如くに皮六の親切袈裟は髪を洗ひ申附たる酒肴を
高楼へ運はせ之より酒宴を始めしが直は大ひに酒も廻りて、
宜い氣合に相成たり久々にて御身の筑紫琴所望を致せ疾く〳〵
と勧められ今夜を限りの調べと思へば取寄せたる筑紫琴一曲
は高く一曲は低く一節は長く一節は低く語音亂れず伴々能く
鶴の丸象に帰く如く霧の梧桐に落るが如く頻の燈盞に洩るる

が如く其頃聞へし名誉の人が一世の名残りと奏でし事ゆゑ眼
むが如く憂ふるが如く笑ふが如く誠に難かしいも
ので名人が致せば琴の座も落るといふ如く直は大きに興に入
り自ら朗詠を奏でられました、實に此頃ほひの遊び事は優に
やさしいものにて當今とは大きに異なつて居りました、偖も直
は熟酔せしを袈裟御前は揺り起し袈御目を覺し候へ風なと買
き玉ふな直イヤ大ゐに我は熟酔せり、明日の勤めもあるに依り
我は是より眠りに就んゝ御身も早く〳〵臥り玉へ、イザ参らんとい
ふを袈裟は慌たゞしく袈今夜は妾の伏房ふて御休み下され妾
は高楼にて臥り度く存ずる程に御免し下さるべし直ヲヽ何
事かと存ずれば いと易き願ひ、承知いたしたり、随分養生を致き
れエ」と見下す直見上る袈裟、是ぜ今生の名残りかと思へばいと
で悲しきに袈裟は眼を潤をほす、直は何とも心附かず其儘部屋

へ這入られる、袈裟は遊りを取片附させ高樓に登り其の身髮を切り燈火を消し盛遠の來るを遅しと觀音經を口の中に讀誦なし夫に代り死する覺悟、眞なり巻き盛り又と樣おたき賢婦人、盛遠の叙に掛り相果るといはいとも哀れなる物語は一寸一息ついて辨おまする

第四席

扨も其の夜は遊々に更け渡り最早四更の頃にもなれば盛遠密重に支度なし、忍び寄つたる瓦が庭先き押せば開いた切戸より差足抜足樣樣の雨戸一枚樣開き窺る階子も心は暗、片折戸を押開きさぐる手先に障る手探左手に糸をたぐり伺おひ寄たる瓦の窓所行燈には黒衣を掛たる帝四思に判然とは知遂ずといへど探れば渡る髮の毛は是ぞ慾敵とぎん盛れと掴はの大切鞘を掛ひ春日八幡、加護上下、松尾、平野、稲荷、紙園、日頃念ずる神達や、願

に力を添給へと唱ふる口の中、ブツツリ首を掻切たり、遊ひといふものは恐ろしいもので如何に平常信心致す雲て斯樣な僻事に何とて神の納受あらんや盛遠佐ゐの武士でも諸神を念ずるものか、人の眼は善といふ土之を以て知るべ是でどざい外」扨も盛遠仕濟したりと己れが家へ立帰り右の首を袈裟の竹筒の中へ私かに隠し拭ひを掛た一切を捨た先るに刃とぼれもなく押戴いて元の鞘におきめ手足をすゝぎ臥房に入り望朝平常より聊さら遅く起出ると忙たゞしき家来慾とといふ者慾「エー早速申上升」盛「何ぢや慾」ハイ大変の事出来を仕つりました」盛「コレ〳〵其方等は動ともすれば大変といふ詞を用ゐるお申すまでもなく大変とは文字ユ大ひに変ると認たある如何なる事ぞ飛々しき事を申すな慾「ハイ、外ではどざいません、只今渡遠左衛門宜樣の方に於て家易ならん事お出来をはつ星まし

た盛「ウーム、シテ如何なる変事ありしぞ」「ハイ餘の義にも候はず昨夜何者とも知れず忍び入りし者と見て高楼に打臥したる家方今朝見ますれば首切て奈りし者ありと見ねまして上を下への騒動、直殿は御存じの如く禁裏守護の大切の御役勤め進ぜされて在せられる御身にて斯はかりの騒動を知らぬと申して世間へ対して面目なしとて門戸を打て人に見ねず、實に御氣毒な事に存じ升」盛「エーツ、何と申す、然らば左衛門直にあらずして要殺が何者にか討たれしとな……ウーム是は成程容易ならん所の一大事其も同族の間柄故ためて訪問いたして遣はす、其方共は家を守れ」「ハイ畏こまりました」家来を立たした盛遣は喪ろく胸を押鎮め私かに己れが入れ置し竹藪へ這入り探索して見れば了ず無残やな左衛門直にあらずして命を懸てこれたる殺殺の首級にてありしまゆる慾りの事に呆れ果て遣は

我ながら不覺の至り如何に致して宜らん雪ドウ由とはかりに座を構へ首級我前へ差置き泣くに泣くも出でず叫ぶに叫ぶも出でずはたゞ暫しの間呆然として首を見詰てあつたりしが善にも強く悪にも強しと世話の比へにある如く、壮士の慨愧後悔胸に迫り思ひも知らずハラ〳〵と落涙をなしつゝ過まてり〳〵偖は察する所殺殺一旦の孝道より我に肌身を免せしは孫の一命を助けんお為め、然るに我れ再度迫り聞入れずんば直を打ち其上衣川親子を討ち腹掻切て相果んと迫りし詞を解くといへども此方聞入ざるより我お身を捨て夫の命に代り其しには邪慾の念を起へさせんと志ぎしにてあつたるよな熱々諸法を観すれば盛者必衰の有様實にや夢か幻の如くなり、非と知つて非我改ためずんはあるべからず定めし左衛門直は手頃最愛の妻を討れ憤どほり深かるべし、敵お怨みを晴さん為め我れ速やか

に直方へ罷越し首級を與へ遣はし獄お真節なるを知らせ此の身の罪を懺悔いたすべしと胸に問ひ腹に答へ直ちに首級を布もて包み懷中なし供をも連れず只一人左衛門方へ參られば果せる哉門戸閉ぢ寂然として居られたり、門を強く打叩き盛雄誰ぞあるいでありて候へ遠藤武者盛遠推參いたしてどざる、左衛門直殿に面會いたしたく存ずる」訪なふ聲の面の如し「家何方ゑて候か少々取込み有之て主人左衛門打籠つて居られるに依て御意得申すると相叶はず御用のほど仰せ聞けられ下され度し盛「アイヤ當家の孫事出來の由承たまはる其の事に付き盛遠推參いたした趣むき宜しく傳へ玉はるべし家「偖て左樣にてどざりしか乘時れ和に下ださるべし」待たして置きしお詫ならく經て左衛門直の聲と致し直「是は左衛門直に候承るまはれば遠藤盛遠大人には我お家の孫事と承たまはり御訪問下だされた

る段千萬忝けなく存候、さりとても其し禁闕を相守る役を勤めなおら斯はちりの大事の起りしを知らず致して居りしとろ此の上もなき武士の耻辱何とて人に面を向べき事の相叶ひ申さん向後見參はいたすまじ疾く御歸り下さるべしさりながら御尋れ下されし御芳志の段は決して忘却は致し申まじ盛「如何さまそもの一言其の最愛の眞方此首を切られる好賊盛遠引捕へて參つた是、急ぎ開門をいたさるべし直「エーツ何と仰せられる儲は我お妻の敵を引捕へて御出で下されしよな、爾らとも知らず意外の無禮平に免し玉へかし、只今門を開き申す」トいふ中キーイと押開けば盛遠ヅカ〳〵と進み盛「アイヤ只今は失禮を致してどざる直「シテ其曲者は何れへ御置き下されしあつ刎も早く見參たし妻の怨みを晴して英れん早く數へ玉へかし」と怒れる西休眞果の如く疑駭逆しまに振ひ上げ、刀の柄を碎けるは

かりに引掴み進み出るを盛「イヤ〳〵急き立つ場合に候まゝ、袈裟殿の死骸の傍へ御案内王はるべし委細其の所にて物語り申す」直「ハヽ畏まつて候イザヤ此方へ御通り候へ」さて連れ立ち来れば袈裟御前の骸は其に横たはり傍はらには母の衣川さめ〳〵ところ打嘆きいとも哀れな有様なり、直はキツト膝を進め

直「如何にや遠藤御遣の只今申されし敵は何れ如何なる者ぞ名乗り王へ孫たまはらん」盛「されば只今其の首級御覧に入れんと包みの中より取出だしたは袈裟の首ドツカと前へ差置かれる一目見るより衣川衣アレ見王へ娘の首に候なり、悶れた事に余り申した遠は何者か致せ志が早く敵を討て賜はれ」直「いふにや及ばん如何に盛遠早く語り候へ」と進寄直の前へ大小取て投げ出し跡へ下つて両手を突き盛「如何に左衛門、衣川も聞、王へ、夜前の対賊袈裟の首を討ち志者は別人ならず斯申す遠藤武者盛

遠ふて候なり直「エーワ偖は遠藤汝の所為にてあつたるかシテ又如何なる怨恨あり斯る乱暴を致せし次仔細ぜあらん物語れ孫たまはりし衣川は衣「遠は〳〵如何に盛遠どれ、何そて娘を討たれしぞ袈裟とは思はず汝と心得て返せ繰りといへば情なし盛「されば其し袈裟とは思はず汝と心得て返せ繰りといへば情なし盛「されば其横合より奪はれし怨恨止みがたく夫ゆえ討て戻りしが今朝に至り家来の話に大いに驚き我が首御遣へ授けんと推参いたし候此の剣にて討ち王へ直「さては左様にあつたるか、イヤ其しも刀持たる者にて候何そて人の剣を借りん次、さりながら自分も罪を懺悔なし己れの首を與へんと手を束ねたる其の者を討て何にか仕つらん先にもいふ通り仔細ぜあらん語れ聞ん首討つは汝の差図ふ預あるべき次盛「ウム尤もの言、然らば委細の事を申さん聞王へ我れ幼きより是なる袈裟とは一度び許嫁

いたせし間柄なれど其儀に打過ぎ訪ひもせず訪はれも致さず然るに過日渡邊橋供養の砌り知らるゝ通り奉行になりし某し警衛いたして居る府へ通り掛りし天晴れ美婦人如何なる人と尋ぬれば故れとろ名高き袈裟御前前名東女と申し衣川の娘と聞き儲はと思ひ今は如何に致して居ると尋ぬれば御邊に思はれ妹脊の契りを組びたるよし夫あるべきものなりせば以前約せし事とありとも今は止みなんと心を尋めんと塲すといへど耻あしや故郷に歸り眼先に逸ぎり、忘れんとすれども忘るゝ事能はず是ぞ煩惱の大は進へども容堤の底は来らずとか、雖の奴と相成り一人身をとがさんより寧ろ打附て口説かんと衣川方へ尋れ云々の由を申しれどもしつゝ、ずかしつ無理に袈裟を呼び寄せ酒宴の對手を致させしが其の場限りにて思ひ締らむる心根なりしも如何に致して締ちむる事相叶はず寧ろの事他人の手

話の花と眺めらるゝも心外と存じ御邊夫婦を討ち取り衣川を討ち我も自殺致さんと賜の語れば袈裟は孫々我を留めしが一徹の某し如何で聞べき孫子も見られば云々新孫いたされて御身を討ち玉へさすれば天下晴れ夫婦にならんといはれし詞我真と存じ忍び込み討取りしが聲をも掛ず、宿も熟睡いたせしと其儀屋敷へ立帰り人知れず首級を理めしが先刻留家の婦事を聞き遂ろき見れば如何にせん宜にあらで袈裟の首、直ちに自殺致さんと思ひしなれども袈裟に盛達と通ぜしにてはあらずや婦人の節義を汚すも不便乙ツには御邊経慎どほりを晴し三ツには自己の悪念我慢愧後悔し深きを御邊の刃に討れんと死を定めて来つたり、早く我が儀剣れ玉へ稲豫いたし玉ひなば自ら首を剣れ申すか、腹かつ裂いて相果んと又衣川には娘の敵一切御恣み腹へ決して手向ひ致すべからず

孤たまはりし直黙然と致して居りしが早「ウーム大丈夫なる決も女の色香に迷ひ道ならぬ快樂を致そうん空存ぜし、空りとて今後悔をいたし戒に首絞授けんとは聊さか見所ろなきにしも為らず、イザヤ妻の敵辱當に立上るまじ、御邊に向べき顔も無きに何と了對手になるべきか早く我が首刎れ玉へと西の方に打向ひ禁の後れ毛かき上て合掌なしたる其儘生れて始めて唱へたる南無阿彌陀佛彌陀佛と唱名念佛も殊勝なり、始終就眠めし左衛門は直然らば盛遠汝の首は申受る覺悟いたせ」と立上り抜き放つたる氷の刃真向にをしかざし、サツト群掛け、討下せば盛遠の首前に落たと思ひきや髻ふつつり截切る、盛遠頓て振返り盛遠は直には日頃の腕前にも似合ず妻を討れて涙きに沈み我が首を討ち損ぜしか、空までの未練なる者とも思はざりしが、御邊討てずは別れ死なん

と勵ます言葉、直は莞爾と打笑み直如何に盛遠御邊先刻よりの詞よも嘘はりとは思はん後悔いたし邪念の心を翻ぜへさは今までの罪消滅いたさん御身を討取たりとても死せし袈裟の再生いたすべきにあらず是れ光則はち佛家に所謂過去の因縁前世の宿業、拭で捨べき命を存らへ来来は極樂往生いたすべきや回向の義を願み存ずる其しとても世間の人に面を向べきやうもなく武士道も捨れしにより出家になりて妻の菩提を吊らひ其の上天下太平國土安穏を祈り籠分ず一の御恩を報じ佛果を拝んと願するなり之れ見玉へといひながら取直したる剣にて髻根元よりふつつと切り切を鞘にれさめました

第五席

此の時盛遠あとへ下り、直を七度拜しまして盛如何にや左衛門御邊の只今の一言金よ以て滑稽に答へ候間からぬ一命なれど

存らへ娘の善提を吊らふ夫より日本六十餘州難所惡所を踏み開き艱難辛苦をいとゝ罪障消滅をいたす佛果を得申さんと思ひけなしとゞ打伏したり二人の様子を見てありし衣川帯比間へはさみ置きし短刀を抜くより早く是も髮かき掃ひ衣「さて〳〵驚ろき入りし亘殿の仁志又盛遠ぬし一旦の非を包まず一命を抛うつて善心に帰られ来られしところ花あり實あり四民の上に立つべき者は斯の如き心得ところあらまほし此の末二人共て善提を吊らひ玉ふなら娘は極樂浄土へ参り来世は必らず善縁を免れん其の元をいへば妻とても聊きかの罪咎きにしもあらず年老いて情ふかからぬ身なれども命を存命へ娘の善提を吊らひ申きんと潔きとくはいふやうなものゝ目に持つ涙保ちかねよゝとはかりに泣き伏したり、折しも此比同谷を承たはは居りし左衛門の宗来聞比様おし開き進み出で「恐れながら先刻より殿達

織同谷を承たまはりしお備世の中は情なき者でどざる其の上我々は別して奥方に厚き情に預かりしもいせめての幸に一通の御回向を申上ん、御免候へそして各々厳差抜き掃ひ髮切て捨たりけり、盛遠の宗人等も左衛門方へ参りし時如何なる恵かと来りし者も三四人ありましたお是等も始終の同谷聞き各々念佛を唱へ主人の出家いたすを見て重立ちし者三人ほど同じく頭を丸めました、備新てあるべきにあらざれは袈裟の善提我吊らはんには故お命を捨るまで最とも愛して居つたる手箱を取家世日頃陸ましき者共、我は親戚へ遺品割けを致さんとて押開ひて見れは一通の消息あり其の文に

憂身ゆゑ五數安の人の失せぬべけれは我お致一つを失ひ候ひぬ、猶り殘り留まり在し嘆き思召さん幸いたそしく時是何幸も然あるべき事と申なお屋先立ち参らする事の悲しさよ

相搆へて後の世の吊ひ願ひ奉法る佛となる望侍りなば坂御前をも亘どの我も必ずず迎ひ奉つるべし萬細やらに申遺したくは侍ぬども故る涙に水茎は跡見ゑ分ずとて

露深き濱芽ず原に迷ふ身の

いとど暗路に入るずおぼしき

ずるに歌の心甚はだ殊勝なり、露深きとて安には罪障の深き事を佛数にも説きて三障五從とて障り多きとを露深き草の原を駆るお如し、濱芽の芽は草茂り、濱犯草原を濱芽ず原といふ露がなくてすら易疎かるべきに深く露ある草原に迷ひなば易疎き事の限り茂き暗路ふ入りなば全よ猶ずならんその心茂り暗路とは冥路にて行く先きくらきに依て大悪道の大暗黒の地にも入らず此の世にては煩悩れ露深き濱芽に迷ひ夫お縁となつて最ど怨ろしき暗路に入るお悲

しいといふ意味と見れ語るも聞くも涙のみ衣川は聞くにも怨へず心も消て深き淵の底、盛んなる猫の中にも鼠おずとならは其々に入らんところは思ひしに老て甲斐なき葬の宿に留まる事の悲しけん、同じ道に行く事れ定らなられはとて笑を取り寄せサラ〳〵せ認ためしは

暗路にも其ふ迷はで蓬生の

獨り露けき身を如何にせん

と詠じて再たびさめ〳〵ところ歎きしおさま〳〵に勝はられ唱名念佛娘の死殿を取片附けし後はウツトりとして打遥せしお世の中の哀れを感じ我が家を捨てゝ摂州天王寺へ到り一佛殿逢坂の上に再たび行き合はん事を祈り他事もなく暮せしお次の年十月八日に終に空しく相果しと、偖是は後の話し、左衛門直は上へ対し御役御免を相願ひしに外ならぬ事とて程なく御

免しを賜はり家財雜具を夫々分配なし家来には暇を遣はし其の身は渡阿彌陀佛重源と法名なし適ばれ修行を遂られしが後には次智識に相成り一度び七滅せし南都東大寺の盧舍那佛を再建なさんとて諸國を勧進いたしたり、眞乘坊重源といふ名僧は則はち此の人なりといふ、盛遠は盛阿彌陀佛文覺と號し、是も辭職を致し家財を取片附け出家は固より樹下石上三界無庵の身分となりて一瓢をも貯はへず袈裟の衣所へ泰り三寸の間四向經文喃々と讀み上げ一日も怠たりし事なく疾疾に頭を剃き寒風に肌を曝し、食を與ふれば啖さず食しも與へざれば食さず、道德堅固にして者の姿は何方へやら其社修行の功見ね進々に上達なす名僧智識に就て經文を讀み習ひ其社後諸國を修行なし金剛八葉の峰より始め熊野金峯大峰岩城天王寺愛宕山高雄嵯峨法輪止觀院摂津院比良高峰祝て月に本六十餘州靈地靈山至ら

ざる所なく番れく拜し、長の年月成る時は斷食なし又成る時は持齋なし春は霞に遊へども峰上霧法て樵を取り、夏は蒙茂れども紫の樞に呑をたき秋は紅葉に歌を寄せて野分の風に袖を濡へし冬は蕭索る寒谷に月を宿せる水を結びなんどして山伏修行者れ勤め懇ろに彼の首陽の別にはあられども蕨を折て命を延べ源窓の樞に同じふして草を枕にして星を肌を隠せ星、座禪繩床の内には本尊持經の外は塵なし斷くて斗藪修行の後再たび高雄の邊に居住して慕きれし事もあり、遂て出家の修行後ね難かしい事はないといふは諸君も御密内の如く凡俗に保てん事あります、邪淫戒といふて男女第一の樂しみ否子孫を殘さうと いふ道を締らめる最とも難い事にてはあらず。飲酒戒といふて誠に結構な天の美禄といはれたる程よく飲めは身体筋骨を緩め、健康を專ら致すとかいふ酒を呑む事も出来ず、妄語戒

といふて假初にも法はる事を戒しめてあ望ますが噂も世界は
つつの道眞佛家でも御方便なども相唱へて用ゐられるさらで
どぎいますが併し僧は決して左様な事はない、侍は計略の中
ふも用ゐんけれはな座ん場合がある我々も幾分か用ゐますが
俗に文の花といふ是我用ゐず只實説計りを繼故致して居りま
すれば那て御体厭隙にありますから幾分か己むを得ず利用致
します、又殺生戒といふ至物の命を絶つ事を禁ぜられてありま
すが汚い御話をする女房ですが假令風欺の類ゐでも生とし生
る者決して命を絶ないといふ誠に不自由の境界に立至つて居
る夫れに依て諸君の門邊へ立ち合力を受け何か再建だとか建
立だとか申して来られる寺家が釋拔といふ物を大地へ突立て
ガラ〳〵音をせまする、那れは目に見ぬ虫か若くは地上に
居る時に遇まつて命を絶つ事悪いから釋拔の音をさして逐拂

つて往来をするといふのが佛に仕ふるものゝ本旨と致してあ
ります、世も末に相成ると新孫道德を守る虫家が少なく相成り
ます釋拔を大地へ突立てるから音をさせます、佛は數へに大犯
に背いたものゝ夫もワツとでも突けはまた免してゐる所もあ
りますが力住せふ突立て心構違ひの坊主は虫の居る所を望ん
で突殺さんと致し虫は辛はひにして危ふきを免れんとすれば
慇々進掛け足下に踏みふじるなどゝいふイヤ呆れて物のいは
れん位ゐな騒動を致す者も大勢あります、次ふ偷盜戒とて物を
奉ふ事を戒しめてあります、是は虫家に限りません如何なる
凡俗な里といへども他人の物を奉へは窃盜の罪は免れんもの
で敢て虫家にはかり必要のものでもないが分て戒しめてあり
ます、猪前田に辯じましたる通り中々此の五戒の中四戒は云ふ
べくして行なひがたきものであります、文覺が虫家道世をする

時に詠まれし歌に

垂は捨てず垂に又我は捨られて

いやなから著る馬樂の袖

此の歌の意味は卿さが解釋に苦しむやうではありますが始めと斯樣な考へでもあつたかも知れません、進々修行の功の積みし事は詳くも申述べて置きましたが他の人の及ばざる大苦行を致したといふ此度明治座にて名優市川團十郎が相勤めまする那智山の荒行といふ此の滝壺の大眼目は是より引續いて辯じまする

第六席

前回に辯じましたる如く出家の修行といふものは容易ならんもので文覺他の僧の及ばざる苦行をいたせしといふは我が日本に於て一二を爭ふ大滝壺に申するは紀伊國那智山にある那

智の滝であります是は頂上より水底まで七十五丈、勿論直流いたす譯では、ありませんが巾も餘ほど廣うございまして此の滝に掛り三箇を脱し不動明王の聖像を拜さんとして最とも難なる術願を起されました、那智山より見てあれば、頃しも十二月中旬谷の雪氷も堅く閉ぢ松吹く風は肌に染み込まれは筋骨石はりを為すばかりなる有樣、然るに白布を以て充分に腹より腹を巻き金鈴を取り不動經を讀誦いたしりゝ〳〵りゝとも鈴を振立て一心不相成り術りを立て居られしが〳〵〳〵〳〵ドーワといふ水勢凄然弓を射る如く勢も虎は打倒されんと致す、斧を岩角に手を掛け、又々滝壺へ参り斯く致すこと三日三夜一山の僧は文覺溺れなき術願をなし滝壺へ這入りし上は勢体微塵に相成りしならんとて折々来つて様子を見るに文覺は眼まじろまず肌撓まず凝然として拓すべからざる勢ひ備も亦

妹の法師かなとて鉄石にも劣しき信心を感賞して止まず、さりとて次第〳〵に勝れ果て不動経を唱ふる聲も枯々に相成りし折しもガラ〳〵〳〵〳〵空いふ激しき水勢の為めに流石不敵の文覺なれども神心悩乱いるしあわや滝壺にて命絶らんとなす此時不思議なる黒雲中より真平字に下られたる両童子文覺の手を取て引上げ如何に出家汝不敵の顔ひれ起し勿体なくも大聖不動明王の聖像を拜きんとなすといへども思ひも寄らざる家宝り只今命終らんとするに依て我れ明王の御差圖に預かり此の所へ下界なし助け遣はす早く滝壺を出て命を完とふ致し催へと奚妙の御聲を承たまはりしより今までウツトリ致して居りし文覺愕然と両眼を開き丈「這は汝何奴なるら我れ大願を起し明王の聖像を拜ぎんは假令一命を此の土に捨るとも止まざるの鐵石心、然るに我が行法を妨たげんとなには佛敵惡魔の所為なるか、聞くも汚らはしき一言、其魔逆のかずんは我が情けなきに出で遇ふなといふより早く右手に持つる金鈴を振り上げて己に打たんとなしたりし時しも、あれやガラ〳〵〳〵〳〵ウワ空山嶽一度に鳴動なし赫々と紫雲棚びくと見る間に右両童子は雲中へとろ飛び去つるり、文覺頭を上げて見やれは正面の頭には菊の蓮華を頂きき日月迂御眼天地を白眼み口に阿吽の二字を含み右手に降魔の利剣を持きへ左手に三天此縛の縄我取り身に墨染の衣を着去真言の数珠を握はれ脊ふ大火炎を負ひ玉ひ、大磐石の上に結跏趺座を遊ばされ、いはゆる知れたる大日大聖不動明王左右に矜迦羅制多迦の両童子其外八大童子十六童子三十六童子一萬八千の眷族を従がへ玉ひたり一目見るより了ち有難く尊とやな日頃念ずる明王の尊体を拜し奉つるの嬉しさよ大日大聖不動明王天下太平國家安泰玉

文覺實傳

法佛法を守らせ王へ」此の時不動明王美妙の御聲高く不「如何に文覺汝の信心鐵石の如くなるに依り我れ姿を現はしたり此の上益々修行怠たるべからず、汝たまはりた文覺文」ハヽアヲ有難く候迚、涙けなしといふかと思ひは今まで振切たる心の強もゆるみしか再たび烈し紀水嘉に培角へ打附られ此の儘命終らんとなを移迦羅制多迦の両童子は文覺の傍はらへ進み手を取て引き起とし身体を撫て王ふと思へは今まで鐵へしも滿腹いたし自然と軟体も疲たまり人心地の附し事ゆゑ悔鉦と致して両眼を開けは之ぞ南栂のつゝ夢なり、此時文覺身体を浄められ恵拜北拜なし我が目頃の心も通じ夢中なりといへども聖像を拜したる端しさよ忘れぬ為に祈念を起さんとて一提の数を持ち荒木へ刹みしは則はち只今切て紀州の那智に残られた荒木の不動則はち是なり、實に涼くも辯ずる通り斯はこりの修行を致さ

んけれは衆生濟度の往を盡す事は叶ひますまい、抑も天竺にて釋尊に從ひ奉つりし目蓮尊者は檀波羅蜜といふ修行を致されました此は如何なる事を致すかといふに人に乞はれし時には假令如何や汚なる大切の物なりといへども否まず遠はすやいふ景とも出来かたい事でありますが、目蓮日々修行致せし所或る日街へ出で相変らず修行いたし来りしに向ふの方よ星霜身は崩れ服汁を流し奥氣弊を貪ぬくばかりの乞食杖にすがつて来り目蓮不便に存じ目「コレ」喃其方は如何に致せしか、さはかり汝身体に相成り定めし大儀でありつちん乞「ハイ御出家有難ら とぞいます拙者は元来富る家に生れました父母の戒しめに背き放蕩に身を持ちくづし悪き病を煩ひ御覽の如く相成りました、唯今に至り先非後悔を致し唯死を待つより外他事もなどぞいません目「ヤレ〳〵不便の至り其方如き者に良き遠はなか

りしがあらばいへ此方捜へて遣はせ乞「ハイ有難うおぎい外、藥乃ないではありませんお金銀にては代へざる品況んや拙者如き凡夫に至迄たも代如何とも為る事は叶ひません目「ウーム如何なる品なるか承るまはらん乞「ハイ夫を御聞なす迄貴僧は何うなさらうといふ目「空れは拙僧藥のへて遣はそんと存ずる乞「夫はどうも有難ゐ仕合せ左様ならは申上ますお私しの藥は人間の目の玉を抜き食すれば癒る事いよ〳〵おぎい外御出家整へてやらうと仰しやつた御親おありますお貴僧の目玉を私しに下さい」流石は目蓮も驚ろいた外な程ん望み是は誠に迷惑とも存ぜしお者ま予賜を遂はさんといふ修行を致して居る者ゆゑ金そら忘ともいひ難れ目「越らは汝に遣はす間早く食して金快を致せと小刀一挺を借り受け左りの眼へ突立てグル〳〵とえぐり取り痛みを堪へて目「ソレ遣はすぞ乞「ヤア御出家貴僧

お氣に早い我かゆふ事を能くも聞ずして手荒い事をなすつたお藥になるのは左りの目ぞアビぎゆません右の目でおぎいまして目「エー是はどうも飛た疎忽千致し為る左りの眼では役にたんが乞「ハイ仰せの如く目「ウム左様か然らは右の眼を抜て遣はす、鮮血淋漓と迸ばしり苦痛堪へがたきを堪へ右れ眼をグル〳〵と抜きソレ是にて宜しいか、アヲ赤じけたし是にて拙者の病氣は全快致すでどざらうといふより早く口中へ入れグイと呑んだりけり、目蓮は痛みは鬼もあれ一歩も進む事叶はず我が一命は捨るとも此乃者の命を助からば大願も成就をせんと て其儘立上つて居る時候の乞食の野孤より先明々と放つて天に音樂の風にのると共に我が両眼の痛みは勿論抜取たる眼は自然と元の如くに相成りしにより頭を上て見てあれは然雲棚ひきし上に安坐なし「如何に目蓮後の行法見届けたり我お師

瑠璃光如来なりといふかと思へは世かの間に姿は見えず音樂は漂朗として耳根に殘りたりといふ、道は佛説でありますから判然御話も出来ませんが何は兎もあれ容易ならん修行でどざいます、さても文覺は再ゐび國々を廻りし所高雄山神護寺と稱けられたる七堂伽藍の大寺先年兵火の塲めに焼亡し畢つたり、新はかりの靈鷲再建を致すべきなく佛閣破壞の体を見るに庭上に草茂りて狐狸の棲家と荒れ果て、四面の垣破れ尊とき本尊を守るべき僧侶も乏く荒に御痛はしき有様なれは何来此の大寺を再建いたきんと企てられましたが、先ども神護寺といふは文覺の再建を思ひ立ちし時より四百年の前に建立致せし堂塲にていとも尊とき古刹なり、其の昔孝謙天皇の御宇弓削の道鏡といふ僧博學多才にして適ばれ名僧の名も空しらず天皇の御惱重かりける時如意輪法を行なひ天皇の御惱立所ろに平癒

波らせられ夫より叡慮に叶はせられ殊の外帰依あらせられ効なくも御身傍らにあり御寵愛深らず百事道鏡の意に背く者なく天皇御自愛の餘り道鏡に天下の政事を任せ御位までも譲り玉はんと致す叡慮にはあれども百官肯んぜず屢々叡慮を惱ませられしが其の頃ほひの習はしとして宇佐八幡へ伺かひ奉つり神勅に任せ御位譲りに相成るの事でありますから和氣清麿といふ人宇佐勅使と進はされ神慮を伺かはせんとて下向の勅命下つたり、然るに道鏡私ろに清麿を招き道鏡是より宇佐へ参詣神勅を伺ひ奉つるにてあるが神慮に叶はせざるやうの事ありては一大事なり、そりとして餘人の知るべきにあらず欺て一人の心にあるべし能々心得神慮に叶はせられたる趣ひきを素冠いる去様へ載れ千善の御位をふまは欺の宗に例たき重官に取立て得させん、萬一職を命に背かは則はち逆勅も同じ事な

り能々思惟い奉し玉へとて旨を含めて出だしたり優婆は容易ならぬる大事の勅使妻夜の別ちもなく宇佐の宮へ著し神職を呼出し叡慮の趣むきを傳へ、其の身体を浄光神慮如何にと相待たり、八幡大菩薩の神慮には決して斯様なる事免すべきにあらずとて神勅の下りしに依り直ちに帰京をなし参内を遂げ天皇の御百官官位は甲乙に依り正々堂々と居流れ、優婆の答へ如何に正面に出御に相成らせられ道鏡は左りの正座に著く其の外百と心耳をすまして聞かれたり、此の時優婆唯静かに進み「神慮の不ど奏し奉つる抑も我が御国は国常立命より萬世一系偏へ今道鏡は愚か如何なる者ぞ」といへど御位を譲る事努々あるべからず神勅新の如くに確として心中に八幡大菩薩を念じ、奏聞を遂たり、天皇は勿論道鏡殊の外憤どり「哭、欲不穏者神慮に奉守せ戒をさみする奇怪の挙動、誰かある此奴を引立て禁獄申附

ろとて新はかり正直なる優婆を武者に仰せ附られ左右の腰を打切られ、高雄の御山へとろ捨られまし去た、優婆は苦痛堪へがたなりしが一心に八幡大菩薩を祈り天下太平を願ひ続が一身は如何に苦痛いたすといへども厳よべき場合にあらず、とて苦痛を忍んで居られし所其の夜怪しき雲棚ひ紅来り優婆が頭の邊りへ落ちしと見れば、衣冠正しき御方あり「善哉〳〵欲一身の苦を忘れ国家の大功立るを心得神勅をは誤まらず侍へし殷懃ずるに感りあり神は非礼を受けず欲の身を捨り遂はす我は則はち宇佐八幡大菩薩なり是より苦痛も自然薄らぐなり」といふかと思へば清麿覺はし痛みも大きに去りしゆえ優「アヤ有難や泰じけなや守護せ玉へと両手伏つけは再たび芳はしき御姿にて「欲是なる仏を信ずべしとて、自ら薬師如来の像を刻んで賜はると思へば夢か現の如く、さりながら薬師如来の御姿は我が

前にあつたり是より清麿病ひも癒に後に一宇を建立なし神護ちせ玉ひしに寄り神護寺と稱へられました本尊は右藥師如來の尊像でありますると斯はるりの由緒正しき堂塔なれば文覺再建を致さんと存ぜしなり、是より名題の勸進帳ふ移るの游法

第七席

法に文覺は浴中浴外を高雄山神護寺再建といふ大願を押立て雨露風雪のいとひもなく襤衣綿の衣類何日か変じて色をも分ず墨染の衣所々に染の出で剥へちぎれ掛りしを着なし怠らず修行いたしてありしお或時院の御所法住寺殿に参りて御奉加の由高かに呼はり「是は高雄山神護寺再建の者ふ候一低半錢の寶財を御奉加あらせられん事を願奉ると再三呼はれども折節官級講の御催ほし最中にて誰一人奏する者も無之錄りれ事に待ち兼び素より不敵の文覺の事ゆゑ〳〵と進み常の

御所の御坪の方へ進み參りて文「這は珍らしからぬ管絃の先刻より高雄山神護寺再建ふ付御奉加の事を願奉つるに取次ぐ者もなきは何事にて候斯はかり愚僧修行いたして歩行くも佛法を住持し王法を祈奉し衆生を利益いたさんといふ大願を望況んや大慈大悲の君千善萬衆の主としてなどか容易く御奉加聞し召し入れられ少口惜き御事に候大願の意旨聽聞あるべしと懐中より取出だしたる勸進帳をサツト開き破鐘に等しき聲を張上げ

清ふ賣職道俗の助成を蒙ふり高雄山の靈地に一院を建立して仁世安樂の大利を勸修せしめんとする勸進の狀

夫以みれは眞如廣大なり生佛の假名を立つと雖ども法性圓妄の雲厚く覆つて、自づから千仁因縁の峯に棚引しより以來本有心蓮の月の光り曇かにして、來た三毒四慢の大虚に顯生

れず悲しき哉佛日疾く沒して生死流轉の街冥々なり、故に文覺無常の親門に淚を落し上下親族の結緣を催ほし、上品蓮台に心を運び等妙覺王の靈場を建てん抑も高雄は山雄くして鷲峯山の構を顯はし洞藤かにして青山洞の苔を布き、岩泉咽んで布を舗き靈樹呼んで枝に進ぶ、人里遥くして塵埃なし、師跡棲み好ましうして信心あり、地形隙れたり、尤も佛法を點むべし、奉加微たきなり、誰か助成せざらんや、仄聞く砂を聚め佛塔の功德を為すも忽ちにして佛因を感ず、何ぞ況んや一紙半錢の法財に於てをや、願はくは建立成就して禁闕鳳曆の御願圓滿に至り、郡邑遠近親疎黎民をして堯舜無為の化を徑ひ椿齡再會の樂を開かん況んや精靈幽冥前後大小速やかに一佛菩提の蓮に至り必ら ず三身滿德の月を弄ぶ因て勸進修行の趣む兒蓋し以て伴の如し

と高らかにとり揆上げたり、此の時御前管絃の座には妙音院太政大臣師長卿琵琶の役尤も此の大臣は琵琶は古今無双とも いはれたる名譽只聞に高く一歳天下旱魃の砌り人民擧つて雨を乞ひ諸神佛を祈り奉つれども其の甲斐なし此儀打過ぎたらんには道路に餓死いたし天下動亂仕基ひなりとて泣き叫ぶ然耳を貫ぬくはかり帝は殊の外嘆かせられ其比頃聞ひを取たる名僧智識に勅綸を下し御祈禱あらせられたるに更に甲斐もなく此の末如何に致さんと叡慮を惱ませられたる時師長公の琵琶の感無なる様ワト思ひ出させ玉ひ「其の方義日吉の御神へ祈請なし琵琶の秘曲を以て神慮を諫め民の憂ひ救ふべし空い勅綸を賜はつたり、師長公大変な御役を仰せ附られ身体を浄め勅綸に任せ日吉大權現へ参籠なし祈せ一世の大変なりと琵

文覺歎曰

沿承三年三月　日

琶の秘曲を彈じ帝の厚き思召しを無に致すまじとて祈られけ
り然るに三日目に至り陰雲四方に起り三日三夜小歇みもなく
神雨を降し給ふたるゆゑ今まで枯れんせなしたる草木蒼々と
して民は腹鼓を打ち帝の御德を有難がり奉つり師長公の琵琶
れ感ぜるを稱賞されました是より誰いふとなく師長公を雨の
大臣といふ是れ全たく師長公の琵琶の秘曲を感ぜしものには
あらずして大君の民を見玉ふ慈母の赤子に於るが如く此の
大德によつて神も納受ましく雨を下し給ひたものでもあり
ませう幸福なる師長公でありました、夫より分て高名にならせ
られました、又笛の役は接察使大納言資賢卿、此の御方の用ゐ給
ひたる笛は紅葉といふ名笛であります、抑も資賢は先祖一條左
大臣雅信公といふ是は宇多天皇の御孫に當らせられる敦實親
王の長男なり、雅信公或る時禁内の歌り内裏にて誰に接かると

もなく一ツの笛を懷玉ひしが世に有難き名笛なり、之を奏する
時は滿朝そして心神徒やこれに相成り得るいはれなる者の致さ
れければ深く秘光置かれ他人に見る事も免さず或る夜察所に
入り眠りに就かれたる所何者とも知れず起し給ふ者あり、雅信
公兩眼を開いて見れば白髮童顏の老翁恭遜に立ち上り朗らか
の聲して曰く翁汝知らずや我は則はち住吉明神なり其の者水
の蒼紅葉をなす時大井川にて諸々の神達と遊び時嵯の山に
風吹かば川瀬に紅葉散り下るいと面白く見しかどに紅葉に交
り空より降し笛を拾ひ取りて紅葉と稱け秘藏いたし居たり
しに先頃内裏守護に任ぜられ天に歸らんとせし時圖らず落し奉
りしなり夫を汝が拾ひ取り秘藏いたすと承たまはる迷やかに
我に返し給へと仰せを承たまはり雅信公申すやう雅信は御
神の御祠には腹へども我も安産笛を好み圖らず得たる此の靈

笛我が家財を上て献じ奉つるとも是のみは子々孫々までも傳へんと存じ候、逆背致せし罪をもち神罰を被むるとはへども やわか返進いたすべきにあらず」老翁重れて申すは「全あらは餘議なき事に候、其の笛の代りに我れ一の寶を欲に乞はんと欲す、其は與へらるゝか如何に」雅「ハヽ委細承知いたして候、如何なる品にても御所望に任せ申さん」翁「さらは汝が家ふ傳ふる唐本の法華經則はち之を申受んと欲す笛れ代りふ與へよと仰せられけれは雅信公夢の中に打案じ笛は之れ今生一世乃弄び物經は當来得脱の資縁なり怨らくは皆成佛道の法を以て如何でか逍遥戯論財に換へん是は奉つる譯に相叶はず如何なる事にても返し奉つ程んと存ぜ去靈笛已むを得ず返進いたし候と御答へを致す、此時明神涙を流し翁「アヽ汝は適ばれ有恵の者なり、さらは靈笛は汝に預くべしといふかと思へは夢覺めたり、翌

朝に至つて雅信涙懐して曰く我れ身命を捨て妙法を謂む神靈竹を投じて感涙を垂るとて、さてこそ紅蓮と稱け、第一の寶物と致空れましたが祈上帝の御守天德四年内裏焼亡の時如何し給ふけん矢ひ玉ひたり是れ只事にあらず住吉明神の召還され給ひたるにやと嘆かれしが其後前の靈笛に同じ穴なる笛を求め給ひ以前に聊さかも変らぬれは之もて紅蓮と稱け孫へ傳来をし給ふ、其の子孫にて資賢に傳へたる笛は後の紅蓮であります、又蘭の役は宮本少將雅賢卿勅を給ひたり、閑院少將公隆卿は時々和琴をろき鳴し風俗催馬樂を謠ひすませ右馬頭資時は今様を朗詠し、心腑を鉛す、抑も是に集り去方々は何も聞に取たる名誉の人々の合奏なれは法皇は勿論上下の諸卿感涙に咽あへず、法皇も折々御感の餘喝歌をさせて在しけり此時前申上たる遥天地に響く笛の如き聲にて文覺の呼はつたる勧進帳幾々

と響き渡り聞えれば公卿大ひに驚ろき遠は何事の珍事なるやよも人間にはあるべき筈ず天魔鬼神の所為ならんと膽を冷し興をさまされて居られたり此の時傳少將雅賢公進み出で雅「ヤ〳〵北面の者共はあらざるや、叡慮に背き候なり、ハヤ〳〵狼藉者を逐ひ拂へせ列しき下知に心得て侍ふ」と北面の武士前後左右より押取り包み中にも平判官資行ヴヤ〳〵と進み寄り資一欧は天より降りしか地より湧きしか當所を如何と心得る、効休宗くも法皇は御所にて候ぞよ、早や退ぞき候面猶豫いたさば辛き目見せんと云ひたれば文覺ニ一言の答へもなく明屋ふ拳しき眼をカッと見開き平判官をぎロりと睨み冷やかの笑ひを洩しけり、判官金よ怒り資「欧一言の答へも致さず、冷笑致する段拾置くべき奴にあらず、退ぞや行けと腕に手を當て押倒さんと致せしが宛然大磐石の如く時に文覺彼の猶進張をグル〳〵

と巻きおき光明をもいはず資行の頭を微塵になれや冠の上より強く打つ怪力の文覺に打たれ何以て堪らん、真仰向に倒れたりしが島帽子は那方へ飛だりけり、資行起上る事も得せず暫らく黙然と致しておりしが猶あつて起上り、大床の上に逆上る、階上階下の人々アレ〳〵資行の度を失ひて今昇殿をも免されざる身分にありながら大床に登りしところ不覺の至りアレヨ〳〵と云ふ中北面の者共の中より心強き人々千人ばかり一度に文覺を臨んで飛掛る、時に文覺は猶進張をば左りの手に取り右手を懐ところに差入れしがヒラリと抜たる一尺餘りの短刀夕日にところは輝やきて裏猶寒き氷の如し、眼逆しま立切り上げ七尺餘りの大法師庭上に立上りしは人間業とは思はれず、上下は人々驚めるまも出来ず、法皇は玉座を立せ給ひ、公卿殿上人前後を守護いたし御奥深く入らせ玉ふ、此の時兵衛尉公朝慌たゞしく来

り公「如何に夫なる法師匿物申さん其方何等の請願あるか知られども茲を何處と心得る御坪の御所にて候ぞよ、誰に許されて這入りしか早く出れは宜し、空もなき時は五所ろに汝の命は終るべし疾へと呼はれば文覺カラ〳〵と打笑ひ文「イヤ決して出で申すまゝ、惡僧衆生濟度に其の為に由緒正しき神護寺再建の者に候なり、院中の御助成を願み奉つらんとこそ心掛て罷り出でたり其を助成いたし給はらんは我が願ひも是ぞ終るべき願ひ空しく相成る上は生て何の要かあ座ん、同じ死する幸はひなり、造營の有無只法皇の御計らひたるべし、詩歌管絃は今生一旦の御遊興、月卿雲客も現世片時の臣なり、何時まで伴なひ、何時までか待き奉つらん、無常の風は朝にも吹き、夕にも吹く、嘶らく長夜の御眠りをさまし奉つらん為め聊さか妙法の

餐を上て勧進帳を繰み罷帰必らず解脱にあらず、滅間し往田夫野人たにもか限に恵じ寄附いたし後生を願ひ候なり、況んや為乗の君主として聖集来迎を願し給はざらんや、貪道の持つ所の剣は人我切らんといふにはあらず、放逸邪慢は鬼神を切り慳貪邪道の魔縁を拂ふんとなり之れ則はち文覺の叡にして左にあらず大聖文殊の智慧は剣なり、不動明王降魔の利剣なり、さあらは我が身に把せる悪業の覺はなし上求菩薩下化衆生の方便なり疾々一分の慈悲を垂れ玉へとて躍り上り破鐘の如き聲を發し近寄る者は掴み殺さんや勢ひなれは此の勇氣に恐れけん北面の人々近寄る者更になく〳〵そ去騒ぎ文覺か乗動ふまゝに致し置く

第八席

其の時信濃國の住人安藤右宗武者所にて此の擧動を承たまは

ると等しく直孫文度に及び一反り反つたる三尺餘りの打太刀を取て眞平宗に乘り來り文覺は後ろより腦をもいはず大刀の反を以て首筋より肩口を懸け、ハツシとはかりに打たれたり文覺更に驚ろく樣子もなく振向てハツタと睨め付け、這は畏怯なる眷動哉する物の體何奴なれば無禮なりと云ふを待ず右宗大音聲に右如何にや法師よく孫たまはれ欽柔和忍辱を以て專らと致し佛に仕ふる身にありながら先刻よりの擧動何意やイデや右宗對手に成らん覺悟いるせといふより早くひらめかしたる太刀ひらめ取られんと心得しより反を返して打ち込んだりさしつたりと文覺体をうはし、七八合之れ又反を返して參ひしが文覺に龍の勢ほひあれば右宗は猛虎の暴たる如き勇氣を現はし一上一下と參ぬたりしが如何に致せしか右宗の大刀文覺の身めに打落されるれは右宗大手を開きムツとはかり

に組附き來る文覺同しく短刀を投げ捨てヤツと聲掛け引組み双方共に刀聲をいたし大地を踏み立て參ひしは究竟金剛力士の荒たる如く北面の人々アレ右宗を助けよ、加勢を為せとて十七八人大手を開いて乘り込み來り手を取り足を取り御門外へこそ引出たしたり此の時文覺は振返り御所の方をハツタと白眼み文如何に方々聞き僥へ勿体なくも國民の父母せも見玉ふ法皇慈悲の聚樂第懸け柔和の表を著せし聖僧の修行なし亜々の帝の帰依いたし給ふ神護寺を再建たきんとするを断くも辛き目見るといふは嘆かはしき事にてはあらず、アヽ我れ如何なる不運にて斯る君の御代には生れ出でたるや、傳へ孫たまはる御座席に在する師長公は適ま是博徒の賢人ととろ孫たまはりしに孝誠を以て親の面打つ擧動ところ致され る夫れ貞觀政要の中ユ大人は赤子の心をも失なはずとところ申

したり臣愚智にして君罰せらるゝといへり、古今の金言空しからず況んや文覺といふ發菩提心の後淨行持律の聖なり、興隆佛法の勇進なり然るに斯の如き君の御心を酌み分けざる政等の手に取かしめを被るとも恨なれ、君或賢王明德の道は弊民を賞むを以て先と致す、況んや剃髮染衣の僧をや、打擲刃傷をせらるゝ段奇怪不思議なり、世は已に末世になつたり、了う無慚の人々や夢現の業をのみ面白き事に思ひて三途黑暗の猛火に焦れん事を知らず、只今文覺を對の如くせらるゝ上は全く身の耶にあらず、臣下卿相の聚を知るべし、俱し遠くは三年近くは三月の中に思ひ知らせ申さんず其の時後悔し玉ふな

と呼はる聲以前に增して響いたり此時文覺に打倒されたる人々大いに怒り、言語同斷なる惡僧の擧動此上は一刻も早く身体をすべきにいたし辛き目見せんと思へども如何なる思召しなる

か曾て之を御免し給ふ文覺義は禁獄をとゞめられたり、さりながら城は究竟露ろく課子も更になく以前の如く罵しり又銘まで文覺を預けられたる平判官資行文覺の居らるゝ獄所の前へ來り資行如何に御坊驕高にな罵しり雀の其方義奇体な振舞を致せしといへども嚴刑にもいまだ所せられず只禁獄をせられたるは衆生濟度の其の爲に年來修行を致す事上國に違しての故なり我等とても空の如く決して無道の者にはあらず何分か罪を宥めらるゝやう致し遣はさん努々心得違ひ致すべからず文「然らむ資行御身に於ても佛道の尊とき事を知られたるか、日月未だ地に落ち玉はず三寶如何でか我を捨て玉ふべからず昼夜神護寺の鎮守の御神達來迎あり、我を守らせ玉ふといふかと思へは夢覺めたり、夫れ佛法の貴とき事は如何なる邪惡を働らきし者とても先非を悔ゐ後悔を術り

南無阿彌陀佛と佛我願まは必らず救はせ玉ふといふ彌陀の本願なり、アヂ尊とさとに候らはず只南無阿彌陀佛彌陀佛と依然暴たる姿に変り眼を半眼に開き念珠をさら〳〵と押揉だり資行も文覺の擧動を眺め資行御法はさはらり尊とき者ふもあらず心得しが今の詞ところ殊勝なり、資行とても佛法を帰依いたさでる者にはあらず然れは先度御身が場に投げ付られ身体を痛め大いに耻辱を被むりしお聊かも恨まず却つて慰さめに来れるなり御身ところ資行迚善提心を起きせし善智識とぞ存ずる以来、金よ、佛法を帰依いたさんとて怨みところあれ恩もあらざる資行まで新の如き扱ひを致されしは文覺ぞ天から為せる大德と見はまず、然るに上西門院安院さ去たる御惱みもあらざりしが眠るぞ却くに忘れさせ玉ふ此の御方は通ぞれ聖德の開ね高き御方ゆ忍勅様なくも帝を始め法皇の御嘆き一方ならず況

して夜月卿雲家暗夜に燈火を失なひし如く悲嘆の涙に蒸れ玉ひ大報の令を行ふは文覺は不敬の罪を以つて禁獄せ屋れしも後来を戒しめて赦されしゆ忍一度び高雄山へ立ち帰へり暫らく教様を養なひ一月はか経て再たび高雄山神護寺再建といふ大願を押し立て法皇御助成なき去雲を高らかに呼はり或は白川又は狼の熊羆集の中にて呼はる聲は高し姿は黒き衣の垢穢み汚れしを着用ふし、裾短なる麻木綿の衣類毛脛現はし高下駄を履き猫遊張を手に取り上をも怒れぬ振舞なり、此の姿法皇の御所へ罷はりの悪僧其の儘に捨置き玉ふ時は法皇の御威光に相拘はる早々く引立て糸れとて其の時の國務三位入道頼政の息仲綱に とろ作せ付られたり、仲綱衆法まり、有無をもいはせず引立て糸り再度禁獄を申附られましたゆ、諸卿殿様の上終に伊豆の國へ

流罪仰せ付られる事に極まりました、伴綱御命受承たまはり薩摩兵衛省にとり申附られ院の廳より下僕二人を附られたり、彼はひなる國伊豆の國の住人近藤四郎國盛といふ者年貢上納の場に海路を上られしが最早用事も相濟み歸國はたされるに付薩摩兵衛を後送の役を免され改めて國盛に申附られたり國盛衆決まつて御受いたし下僕二人は召連れる事に極まりました、扨文覺を受取りし國盛は我が船中へ連れ来りしが折しも風悪くして出帆致する事も成り難れ船掛りして居られしが武將なる監督侍又は院の下部ども使嗾を慰さめ難れ文覺に向ひ○イヤ御坊御迷惑の度宛仁大度の思召しを以て流罪に仰せ附られしとは此の上もなき幸はひなり、夫と変りて我々は遠く海路を伊豆國まで送り参るとは迷惑の至りなりさりながら御坊は隨分と人ふ知られし者ゆ忍定めし別れを惜みに来る者もあらんと存ぜしに未だ誰一人とあつて訪づるる者もなきとは氣の毒なり御遣知らずや伊豆の國までは日數も餘ほど相懸り候上とは腹を充る事も相叶はず又我々とても左の如く今まで後送の役を勤めしが隨分と德分にも預かつたり御身は何と心得た、文覺心の中に思ひけるは扨は此奴等我に對して賄賂いたせよとの詞と見たり苟しくも官經況食みなおら淋しき心の奴原哉イデ一泡吹かして笑れんと胸に問ひ腹に答へ文「イヤ各々能吉ろいはれたり、愚僧とても隨分知る者もありしが斯く罪入になりしゆ忍便り致する事も叶よまじと存ぜ去に今各々の詞にては便り致しても差支へはなきやらなり○「されば仔細なし我々免し遣はず早く便りを致し黄金銀取寄せ玉へ、世の中に新る貴とき物はあらず、シテ何方の知己なるや頼みとあらば我々の中より羅り越し消息をも参らすべし

来傳てをも申し申きん文「ウーム其は親切なる言葉哉、さりとて長らくの間禁獄せられし事ゆゑ思ふやうにも物語りも出来ず其の上会するものゝ少なければ聊か苦痛感じてどざる、食あらば與へ玉へ、腹を油のへ顔みたき事あり○「成ほど尤ともの一言暫く待候へとて胴の間へ至り近藤四郎國盛へ此趣を申入る國盛元来強慾者此の事を聞きホク〳〵喜こび國「左様なら是は先分食事を與ふべし其迄上取家たる金子は半はは我が方へおさむべし是れ許す許さざるは我が權内にある事ゆゑよく〳〵申聞せ候へ○「畏こまつて候とて郎黨を文蔵に向ひ○「如何ふ御坊只今御主人へ願ひし處早速御許しを被むつたり、宜きゆゑに仮を食し玉へ文「ハヽア許されしとな、つゐ辱けなしをれど我が所望も仮にてはあらず、酒あらば振舞玉へ○「エーツ御坊は出家でありながら酒を飲み玉ふか文「イヤ〳〵飲酒戒とて飲むまの

叶はざるは極めて未熟の修行者なり我等の如き名僧遠德に勝れ居る出家に何ぞ酒ある数へあらん、魚類も食し候ぜ○「ハヽア是は重寶なる事かなとて一同の者大きに笑ひ酒食の後は何分かの金をも掴んと心掛しゆゑ酒肴を運び出し注ぐ者どに宛鯨鯨が百川を吸ふ如く魚を暴すに飽たる醤の小島を食むが如く一座の者は心にもなき進從笑ひ孫々に取持ちしゆゑ酒三升餘り飲み仮をしたゝかに食し文「アヽ久々にて充分の食を致したり忝じけなしといひつゝゴロリ横たはり早や眠りにも附んとなす一同の者○「如何に御坊御遍食事後は例の寶を取寄るとの申されしが何れへ参つて宜しきやコレサ眠りては相成らず起き玉へ文「アー恐悦き人々哉○「イヤサ何方へ使ひを遣はすのゆゑ親成なるか朋友か文「アヽ、、其のやうに急き立られては答へに困り申す先づ暫かに聞き候へ拙僧各々方に使ひ我

類みたきといふは親戚にもあらず朋友にも侯はず○「ウーム」シテ如何なる人でどざる文「されは拙僧恥かしながら二世も三世も先の世も又先の世も〳〵変るまいぞや変らじと互ひに詞を誓ひしのみか我等が為なら命をも厭はじと約せし姫の侯なりの人で名は何と如何なる身分か知られども叔母好きにも程と云ふ何なる所へ思ひを掛しか我々には更に合点も参らず○「エー何といはれる、アノ御坊ぎ二世を約した姫やいふは何と一人が云ふは今一人頭を横ふ振立て△「イヤ〳〵きまでに宜ふな、繼は思案の外とるら御坊とても侯どり難し如何なる姫で侯や聞まゐしくと膝進むれは文「されは其の繼人といふは清水寺に在ますなり△「エー清水寺に在りといふは尼御前にて侯か那れには尼の居らぬはづ、扨は姫にはあらずして男色を好まれしか文「イヤ〳〵欧等の推量大きに違へり我ぎ繼人は外ならず大慈大悲の観世音菩薩なり、早く参つて我ぎ事を告げ物を買ふて来侯へといふと思へは其のまゝに肱を曲て枕となし雷の如くに鼾をかき熟睡をして終ひしゆゑ並居る人々果氣に取られ何と詞もあらざりけり

第九席

此の時雑人の中より重立し者進み出で「ヤヨレ御坊起き玉へ、御身銘まで酒食を致せし上我々を恥らしめたる欧奇怪の至りなり、起き侯へと揺り起せは文覺眠眼を見開き文「アヽ耳喧ぎしき人々哉、さまでに財を掠たく欲するか、一旦は権威を以て我れを辱めかし出ださせんとなしたるに依て部つて欧等を歎むいたり我れ仏家で所謂因果應報我ぎ罪ならず欧等の罪なり罪を謝せは罪悪も消滅せん此の度は真の事を申るぎ行なふて見玉ふ○「如何にも其の報ひすちあらは何にもあれ致さん文「さも

らは各々に類み申す我も俄かに禁獄せられしまゆゑ持ち来る眼もなし夫ゆゑ打捨て置んとは存ぜしがつら〳〵考へふるに此上もなき寶をば長く土中に密しく致すこそ國王の授へと存ずる○「シテ如何なる財をば隠し置るれし」文「されば我れ長寺の開高旗山神護寺再建に依て五條天神の石の島居の根元を掘り深く埋め置たり砂金銀合して若干各々分配を勞して之を掘り来り玉へ只今の馳走に預かりし報ひも出来ん且又我が身に附て彼の島へ渡り幾分の助けにも相成ん、此の浜花津より道は少々遠けれど急いで御出であれ萬一奸者あつて掘り出さんも圖りがたし○「ウーム然らば御坊虛言はどざらぬか」文「固より虛言は申さず是ところ金たくの幸なり○「さらば兎も角も往つらんとて四郎國盛へ申入れしに國盛殊の外喜とび類を友なる慾深き家人四五人に申付け早々掘出し来るやうにと上陸を許した一同の者勇み立ち夫々支度を整へ五條天神の邊りへ来りしに、幸は忍夜も更けたることゆゑ神職始め一同の寝りに付者も見ねば、ソレ掘れといふと右の根方を各々一心に相成て掘り廻し見れども更に一物もない△「ヲイ〳〵右か左りか尋れて参りしか○「されば坊主のいはれなにも右の島居と申した△「然るに是ほど掘て見ねばなる左りの方にはあらずや○「イヤ確かに右と申した△「ハテ、社へ向つて右といふたか○「ウム夫はウイ右といふたか○「是は矢張り、シテ見れば此方にて能くも心に留ずに参つた△「是は無駄骨折たりイザヤ彼方を掘て見はなきものと見にる、用なき一同汗を拭ひ又々今一つの島居の根方を掘りましたがんとて一同汗を拭ひ又々今一つの島居の根方を掘りましたが一天乙天と掘れども更に分らぬは是ぞ如何なる事であつたるかまた一物にも出遇はず○「イヤ〳〵御邊の如く急き玉よて

は相叶はん彼の聖僧の深く秘め置しせいはれたに依り今少し掘て見んとて益々力を出だして鳥居の廻りを掘たる事ゆゑ何ぞ堪らんヅヽヽヽヽヽズドーンと倒るゝ鳥居其の音れひたでしく一同の者は大きに興を害まし又しても彼の坊主の為に欺むかれたると残念なり、如何に致して宜らんと身体は疲れる空腹にはなる迷気に取られて居る時しもあれ此物音を聞き神職はじめ一同只事ならじ盗賊の所為ならんとて打騒がれしとぞゆゑ彼奴等一同大ひに驚ろき此の上生捕にも相成らば我が身はおりの為ならず大将の身の上にも拘はる大事なるべしとて一同跡をも見ずに逃出した、扨翌日神職はじめ信徒の人々集まり様々に評議いたし此の鳥居の義を先達て建しのみにて致なく致して元の如く倒れ二術三術に祈れしところ神慮に叶はせられざる事と見江たり、早く再建を致さずんば此の上如何なる御

咎めあらんも職らに造営をいたし臨時の祭禮を営まれしは実にも可笑き事のかぎり、扨も四郎國盗の家人共も嘆きながら立帰り國盗へ此段申入ければ國盗怒るといへども表向彼之を責る事相叶はず、中には聊か怪我いたせし者もありしゆゑ手當を致し居りしが餘りの事に腹立しく存じ國「如何に御坊、扨も〳〵御身は虚言をのみ吐く者哉、我々に大滑稽したりと怨みがましく陳べられる文覚カラ〳〵と笑ひ文「如何に汝等は浅間しき心哉此の大地の底は金輪際にて、黄金を敷き満たり、などて夫まで掘り及はねや、我等が埋めし金銀は五條天神にはあらずして北の天神にてありしものを餘り急がれて過まつたり、今一度念参つて掘り玉へ、アハヽヽヽヽヽヽヽ」此の時國盗進み出で國「御坊、扨も不運なるは汝であつたるな!斯の如き遠流せらるゝ身に相成りしに誰一人とあつて別れを告る者もなく名残を惜む者なきは

世に生き甲斐もなき身の上なれども夫れも命を助けられ恥を恥とも思はず有難しと心得何を樂しみに遠々伊豆國へは行かんと歎き、文覺振返つて莞爾と笑ひ「國盜船く國かれよ我は抑も千八才より惡ぎる事あつて出家遁世千手姫の持者にて二千八部の衆番守護し王へは何として俗人を支とせん己れ等假令守るとも遁ぎかんとあれば心安く一門の人々も新る尊とき上人は出で来て院の御所までもさる者ありと知し召されたるは此上もなき面目ならずや是迄り錦の紗着て故郷へ歸りしよりも猶しならん理合は今りまし名ろ、といはるも思へばカラ〳〵や笑つたり流石國盜も赤面を出し其後は更に詞を交す者も出く文覺敢て心にも懸ず勸めれは食事いたし勸めぞる時は食残も乞ず四五日の名ど逗留致せしに漸々順風に相成りしとて纜を綱を解き當所を出帆なし住吉住ノ江和歌吹上玉津島明神を伏

拜み日前黒髪を附に見て由良の浜史田部の沖新宮の浦に船を著け熊野山を伏し拜み南海道を辿り潜き廻して遠江國名田の沖へと差掛る折しも海上何とはなく騒立ちしと見る中ガテラ、ガラ〳〵〳〵〳〵〳〵女浜男浜の打寄せの如く打寄せ〳〵〳〵と上を下の騒動波に揺れて船は死鰐木の葉を浮めも如く揺り上られ揺り下され國盜はじめ一同の郎黨生たる心地も更になく上を下へと逐しつ水垢をかい出せと各々必死に相成り防ぐと雖も中々に静る様子更になく船長は震る聲を振上長「ヤア往ません皆さま御覽悟なさいまし逆も助るとも思つしやるな今の中死鰐は一所に打上られるやらに吠橋へ細引をゆつてくゝし附て置方が宜ろおせら」斯れ如き聲を聞て國盜は「アヽコレ故等孫はつれか、斯様な折節来出したるは我々の不運なり、さり

とても此儘に捨て置くべきまゝあらず、神佛の力を借るより外手段はよもあるまじ何卒致して日本六十餘州の御神別して伊豆國は御鎮守三島大明神或や筑紫守り王へといふ言葉の下より耶靈共平生祈りし事もあらぎる神々の名前を稱へ一心不亂に祈誓をなすは下亜法に申する苦しい時の神頼み夫にても中々鎮まる景色はなく金よ浜風烈しけれは國盜短刀の鞘を拂ひ柴一番に髮ふつつと掻切りたるを見るより我れ後れじと耶靈ども後々髮を切り拂心返らん事を操返し法呼びしとろ悶れ苦り金よ烈しき浜の場に今は櫓を取り舵を直する事も叶はず身体殊の外勝れ果て死を待つより外なし、時に國盜文覺は如何にあらんと見れは彼れは赤縮としして動かぎる事山住如く、結跏趺座をなし両眼を半は開き扣たり、國盜文覺に向い國「御坊斷ほどなる逆風御邊と何とも思はぎるや文「ウーム」されは是とても天

なり命なり蚤ろき驚くべき事なたらんや是ぞ欲等如き邪慳の奴等只利慾にのみ走り佛法をさみし神を敬かじめ我等如き名僧へ對志欲まで無禮を働らきしに依り八大龍王欲等の罪を責ん為め斯く風波を起せしならん國「是はしたり我等は決して佛法を排ら ず神を疎略に致せし事なし御身とても宗家の本分を守らは何ぞ疎末に致そん動もすれは徳はれるに依り腹立しき餘り敢て欲禮をも致ぎず文「ナニ神佛を疎略ユせずとは然くいふた我に默堂かれ五條天神の石の島居を倒し佛に仕ふる此の身が賊縣を遣さずとて疎略乃板かひをなせしにあ産ずや、然るに逆風の起りしとて髮を切り拂ひ神佛を祈るの可笑しさ、神は非禮を受け ず斯はかりの事を知らぎる者が政事を取るといふは嘆かはし犯事にて其の支配を受る民ころ不便の至り、さりながら今に至つて後悔いたし銘まで心を改ため是より仁政を施

とし民を搦で神社佛閣の鎚にかけたるを起し廢れたるを再建致さんといふ心になれば我れ立所に尊とき經文の功德により風波を鎮め汝等の身命我全ふさせ遣はす 國 如何にも怨れ入て猴何卒經文の功力を以て一同の命を助け玉へ、さある時には我々佛法に帰依いたし長く大檀那と相成らん努々偽はり來を申さず汝等も早く御坊に御願ひ猴へ、只今考ふれは院の御所をも憚からず鉞まで我が心を貫ぬかんと致せし聖僧に猴ゆ為定めし波を鎮堂る法もや知られん行なひ玉へと俄かに平身低頭なし祈る様子を見てあれは耶蘇勸め船長龍取水夫に至るまで皆々聲を揃へて、アワレ助け玉へ救ひ玉へ向後決して佛法には疎略の挙動致すべからず南無阿彌陀佛彌陀佛とこそ唱へたり、文覺こワコと笑ひ文「さらば汝等の生命を救ひ呉れんと攜る船端に上りろきもせずノワリ〳〵と舷先を踏んで進み仁王仁王に立ち上り

念數を唱ら〳〵と押もんだり

第十席

此の時文覺天地も響けと大音揚げ 文「如何に海龍王神も確かに聞け此の船中には大願を起したる文覺と申す名僧の來たるなり、我逆佛道を帰依してより千手經の持者として深く觀音の志願を頼み龍神八部正しく如來説經の砌りにして千手の持者を守護せんと誓ひを起すにあらずや、さあらば我が如き所の者を守らずして誰をか守り申さん汝等我が來りし船と見は頭を垂れ波を靜め行くべき所へ送るべき ふ部つて逆波を起し來切込みし者を苦しめんとなす條奇怪の至りなり早く風をおさめ波を靜め猴へ猶豫いたして居る時は第八下界の小龍めら四大池水の八大龍王に仰せ附て汝等を怨まち制敗いたすべし如何に〳〵と呼はつたり、一同の者之を聞たまはり大きに驚ろき○

如何に御坊等とき經の德により浪を靜め風をおさめ給へ船をやらんといはれしに抑も只今の惡言は何事に候や龍王怒つて金よ逆浪と相成り申さん、又御邊の惡口聞捨ずんは我々を只威すのみにして法師にあるまじき擧動ならずやと難じたり文覺カラ〳〵と笑ひ「一通りは尤もなる尋ねなりや雖ども我が一言の下に今に風浪も止み申すべし汝等を威す言葉にてはあらず、暫らく待て居候へといふ中不思議や風は次第に止ぎしゆゑ波も追々おだまつて元通の如くの順風にとろなつたりけり、一同の者共は大きに安堵なしアサ尊とき上人の御德かな、斯る御方とも知らず只今まで無禮なしたる其の罪は何事も許し玉はれと宛れば文覺ニワコと笑ひ文「イヤ〳〵這は我が法德のみならず全たく以て經文の功力に依るものなり各々の目には御佛の姿は見ねまじ我が目には數安の神佛守護致し玉は

る事の現然たり爾今以後は必らず佛祖尊とみ玉へ我れ此の船に居らずんば誰か一人助かるものもあ程ずかしと左も尊ぶに陳らるれば一同の者合掌なし、アサ有難き彌陀の本願南無阿彌陀佛彌陀佛と唱へたり斯様申上ると雖に迂闊のれ話のやうではありますが全たく虛說ではない文覺元來學識も勝れて居るに依り天文などの事も能く辨まへて居り、いつ暴風が起り又止むべき豫じめ知れて居りし事と見にます夫を眞直に申せば普通な入物ですが暴風の起りし時素知らぬ顏を致し大胆にも眠りに就き諸人狼狽ふたすを見て却つて嘲けり止むべき刹限成計らひ經文を讀誦なし居りましたに依り事はひとして暴風は止みしも之れ文覺の力と思はせん計畧斯様いたして近々佛法信者を募る、英旗よく人を欺むくとは斯様な事を申したのであ望ませう、謂じて普通の事をいたして居りましては若

も容易に人を帰伏ふたす者ではありません、扨も其の後船中の者共も文覺を尊敬致すること究然恩ある主に仕ふ如く國盜に於ても膝筑丈へて已れの心掛ぎる事を尋れられるに元より武門に生ひ立し文覺なれは武家の事までも好く辨まへ成る時には國政の扱ひ方軍人の掛引等を物語るに一々法に叶ひ理に當りけれは國盜はじめ一同金よ尊敬をいたす國盜の家人に刑部明盜といへる者前日五條天神の鳥居を倒せし怨深きものゝ頭と云り去者にてありしが船中に文覺より孫々の事を承たまはり先非を悔ひ發菩提心頻里に祝しけれは國盜に頭ふて文覺の徒弟と相成り髮を剃り授戒を受け文覺の文の宗を取り我が明盜の明の宗を取り文明と名けられたり、其の外の人々も出家入道までは致さずといへども佛法を帰依いたす心盛んに相成りしといふ、シテ見る人は聖人の仰せられし人の時

は元善知識と説かれしも理りと覺ったり、抑も日数を経て伊豆の國へ着いたし名古屋寺といふ寺へ籠居致空れました、抑も此の寺の本尊といふは觀音大悲の靈像にして靈驗著たるとりせて國中の貴賤参詣群集なす況して文覺といへる名僧御出に相成り是して益よ参詣のものは引きも切らず是れ則は国盜をはじ先今まで邪怪でありし者も善提心を起し帰依いたされゆゑに謙々く吹聴を致せし事を見ねます文覺よく善男善女に経文の功力等を親切に諭されましるるら一同大きに喜こび禍福吉凶を占ふて實ふに聊空かも違はず悪きは悪きと遠慮もなく申し宜きお上にも善に導かんといたす此の事近郷近在はいふも更なり遠方までも聞ひしかば金よ文覺の名は高く相成りました、扨に兵衛佐頼朝は長らくの間配所の月を眺め空しく光陰を送られました世に在す時も朝廷を守護なし奉つりし下野

守義朝の三男にして兵衛佐にまで任ぜられ武勇はさまでにあらず、とい函ども父に劣らぬ大器大才なりと人も欲まひ我も許せし人なれば斯く流人と相成りしより以前のオ器は何れへや消失せり理非の辨別もなく藤九郎盛長はじめ五六の人に侍づかれ或る時には大いに笑ひ又或る時は涙かの事に後き悲志み交隈もなき擧動をいたし居られしらは平家の入々始めは法はり事ならんとて心を附け更に油断を致さず擧動模樣を見て一々那へ注心をいたせしに今では斯はかりの呆故何をか仕出すべきとて那へも告ず那に於ても頼朝の樣子を聞き安心せしが其後彼を討といふ下知もなく是によつて安らかとは行れども日々の自由を足て在せしが近頃人々の噂を聞に文覺といふ名僧名古屋寺に祈々布数いたすと聞き那の人の噂かしく心得玉ひしが盛長を呼んで仰せられけるは「如何にや藤九郎近頃入住噂を

聞くに文覺とやらいへる者名古屋寺に居る延壁き彼れは人相を視し告函をトふよし予も彼れへ對して親相の義を申附んと存ぜしが只今まで作り呆故と笑り歎むき居し者が今に至り告函禍福を尋ぬれば心ねぞけし平家の輩ら心らず油断を致すまじ欲は如何に思ふや「藤御方」そもの上意甚しとても聞かざるには無之、是より君に勧め奉つらんと存ぜし笑り、さりながら君の上意の如く一度び心を奉ひし國人等にあやしまれんと只今まで言上はいたさん「頼「ウム、汝も左樣存ぜしが、然らば斯樣いたせ、予が呆故を佛に願ふて癒さんと彼の寺に於治なし文覺とやらんと自然近づき懇意を結ひ、心根試した上而して又計らふべきとともあらん、さすれば領主、國人誰一人疑ふものもあらざると存ずる盛「ハヽ、尊命畏まり奉つり候、遂き應ずかりあらずんば必ら長近き憂ひとならん委細畏まり奉つると御受

政しました、是を以ても知るべきで世人動ともすれば奇論を吐き顔朝は只大德のある人ふて決して武將の器にあらず會弟義經孫遠かに勝りしやうに申されますお解論も甚はざしく顔朝と義經とは同日の論にはあらず、顔朝は則はち天下の政事を司どる大政治家であらせられます、義經は戎程軍眾は勝さか顔朝に勝りし研ありしかも知りませんお天下の事を新理なす中々く政治家などふはゆへないと成る學者の私しにお話になつるとゝおどゞいます、閑話は叔置き盛長參治人と共に名古屋寺へ至り觀音菩薩を祈り文學の說經を孫たまはつて如何さま噂に違はず其の說く研一々理に叶ひ更に偶想のみをは歸依いたせと申すに至あらず、仁義礼智忠信孝悌を尊ばらとゆる吉神佛の尊やき事を心に掛け祈る間も更に忘れずは敢て業務を施うち狂ふに及はずと數へる事の中にも自然と含む平家の無道勿体

なる事も千善れ君我慢ろになし奉つる我慢猶長の擧動を此儘にして置かは何日の間にか朝家を元の如く盛んになすべき時々あらん空一言一句慨嘆悲憤、朝廷の衰微を恢復なし奉つらんといふ、即ち勤王論空いふても可なり、空りなおら愚夫愚婦は勿論世かの學問をせしものには決して聞き取れんやらに說かれました、盛長は固より千分研究をいたし法殿へ言上をいたさん心構にて來り居りし事なれは彼の人の云はれる事を記臆なし去返り此の段を言上に及ぶ、法どの顏孫しく思召し、金よ盛長を日毎に遣はし目去ぬ々に深子を見せて居られました、進々文覺は弟子文明にも懇意を結び又相照といへる當時文覺方に修行の場に來られし密家にも懇意を結び先祖の善提を弔ら上て實はんとて相招き經文畢りし後法殿相照を深々に待遇し御手併へ呼寄せられ法「如何に御坊見受る所御邊は那の人と覺は

る、修行の場とはいひながら斯く草深き片田舎へ流され定めし都の事を思ひ出だし懷かしくこそ思ふらん相「ハイ尊命には雁へども決して愚僧などは左思ひ申さず三界無庵の境界なれば父母親戚のあることをも忘れ佛に仕ふるより他事もなく況んや花鳥風月何とも思ひ申し候はん君とろは定めし都戀しく思召し候はん、頼朝カラ〳〵と笑ひ頼「イヤ〳〵決して此方とても左思はず都に居りし時は隨分と辛い勤を致し動もすれば戰場などへ出で朝たには命を捨つる覺悟を定め夕べには惡ぶき日を不思議ふ思ひ兜を枕の代りといたして家れ食する者も元分ならず却て斯く配流となりしよりは延たき時には勝手に起き寝たい時にも自由自在君に仕ふる身にあらずそれは結句樂しみは深かるべし左様にてはあらずやと又カラ〳〵と高笑ひ盛長傍はらより進み出浴〳〵中浴〳〵、浴外の孫子、源平両家の葉裔盛衰

夫とはなしに尋れるに相照は頼朝に賜申しても可笑くもなきに笑ひ物の善惡は能くは分らず盛長は夫と代つて能く世上の事をも心得し言葉敵と存ぜしゆゑ朝廷の御事藤原氏の様平家の盛んゝ源家の衰ろへ、伽洞の事に至るまで愚僧は能く覺にず と いへども見聞せし所御物語より申さんとて孫々に話され盛長聞て盛「イヤ師の御坊は近頃都より来られし事ゆゑに定めし御身より能くも心得候はん、招待いたし接待を頼ふ其の上我お殘したる都の妻子の孫子など聞まほしく存ずるお如何なる御心に候や御遠に尋れたら分り申さん、相照聞て相「イヤ斯く申したら師を排ろやらには當れども我お師を遠ばれ遵徹ふ隙れ居れども其の遷動祈々変生成る時には高聲安言にして人を罵しり殘若無人、又は柔和神妙にして禪定に入る如く時雨の空の晴れ曇り秋は紅葉の濃淡きお如く、取定めぬ心にて三天計りなる神の

枝を數多用意し己れが心に叶はざる時は些かの事に打擲なし其振舞の穩やかならざる事多けれは初光は數多の僧侶も修行の場に赤りしが今は傍らに居る者も少なく誠に怪有なる事の個なりと告るを聞て盛長額朝卿を見返れは扇子膝に突き立て聞て居り去も何日の間にかコクリ〳〵と睡眠を催ほし相照此の有様に氣に取られ早々に暇申して帰り掛け口の中にて咲やくや汚叔も噂に違はず始光は利口なる口ぶりも今とろ本体を現はしたり那れが源家の嫡流とは叔氣の毒なり宝て其儘名古屋寺へ帰られましたし

第十一席

其の夜佐殿は盛長へ對して密事伝申含められしに盛長翌日名古屋寺へ赤り相照を招き佐殿伝言を吊らはんが為め参詣いたし趣むき猶文覺上人へ對面の事を申入れゝは相照此の段文

覺へ申すに快よく承知に及はれました盛長左帰り此段を申上げ翌日佐殿名古屋寺へ盛長一人を召供して御出で相成りました相照迎で向ひ客間へと通されました一通りの挨拶畢りし後只今師の坊御目に掛るでこざらう前以て申上て置きまするが聊さ今日は心狂はしく相成て居りまするに依て何々らなる失礼あらんも知れがたく此の義御用捨玉はるべし頼「是は叮嚀なる一言決して仔細はない親者善薩を拜し奉つらんと存ずる案内の義を願む相「承こまり奉つる」と相照の案内に依り佐殿主從勢を淨めて禮拜を遂げ元の客殿へ通り相待て居りましたが大凡二時はかり待てども出で来相照も其後姿を見せず盛長傍はらふあつて心ぱらち扨も文覺とやらいへる者無禮も程とあれ如何なれば斯く延引いたすらんと口にはいはれども佐どのゝ思召し如何と存じ居りしに佐どのは怒りたまふ孫子

もなく欣然として座し玉ふ、夫より一時ばかり相互にちこちり〳〵といふ板敷を踏み鳴らす音佐殿の在する家間の廊下を家を高くからげ脛を現はし通り掛りし一人見上るはかりの出家家間を覗き一言の禮もなく斯くする事なく三四度佐どのは如何なれば斯くの如くするならんと思ひ居る時物をもいはず後姿の障子をサツと押開き頭ばかり伐差出し兩眼をカツと見開ハツタと目眼しかと思へはカラ〳〵と笑ひ又片眼を以て睨み附け差俯向ては頭を周らし佐殿を見る事四五度、佐殿は心中に扨は此奴が文覺とやらいへる者なるう時にとらば遠慮もなく人の頭を叩くと聞しお見れは何やら得物を密空へし振ず今に打たん、打たは打て、如何に打つとも恐へて見せん、又耐へおたくは逃ぜらんのみと思ひ居る時ノコ〳〵と進み、禮をもなさず御前に立上り大口を開てカラ〳〵と笑ひ文「可笑や可笑し御邊でも

つたるとな故下野守殿の三男年の重なるとて以ての外に憎まれ玉ひけりアヽ痛はしの有様や、氣の毒の御身の上やそいふかと思へはハラ〳〵と涙を流し切て接たるやうにちつちもなき事を申されしお何思ひ寄ん跡へ下つて禮を致し佐殿も何ともいはず遥りに眼を配つてあ法たり、此汪時に文覺猶あつていはれけるは文「如何にや佐殿御心丈夫に御持ち遊ばせ法師は日本國中を修行なし在々所々に於ても孫王の末裔として見参を致し奉つる事大將と相成り一天四海を奉行すべき人なし成は男ありといへども學識に乏しく智ありといへども餘りに穏やかにして柔弱に流れ人を押へる威權なし威なきも勢の難なり、男みて猛きも人の仇なり、されは威恐ありて柔和ならんは國の主となるべしと心に思ひ、君を見奉つるに表ては柔和にして能空入の詞を容れ裏強にして威權全たく備はりしと覩相いたし

申せしが頃刻は孫なりといへど心に奢つて帝位に暴らず高祖は賊穏やかにして部つて諸侯歸伏いたしたり、御邊は無く高祖に似たる所あり、アヲ顔拭しや、目出度し〳〵とぞ賛嘆されたり、法殿之を聞し召し遽りを輝かる孫子を見て文覺法どのゝ眼中を夫れと悟り俄ちに膝を張り上げ文「アヲ此の人は人が踊いふても碌々答へも致さず偖てとろ眼しに違はぬ宗教と見ゐるり、言葉敵にさらに出らず斯様な人の我が庵りを汚せし出ろ腹立しや斯く致して呉れんとて棒をおつとり頭を徒たかに打たり、法殿大いに驚ろき是れは手荒き法師の振舞かな斯様な所に長居いたしてあつたれは如何なる憂目を見法らんも知りがたし逃ろに如かずと走せ出だす、文覺は暴れに暴れ、乭陸なり未練なり、法師に後ろを見すする法やあらん、返し玉面と呼はれども一言の答へもなく其の儘にして立帰る、文覺は寺中を金よ荒れ廻り漸

ちく立て殊の勝れしと見に、我が居間へ参り、棒を傍へ投げ捨てゝ横たはるを珍しく前後を知らず寝入たり、相照文明等は師れ御坊の機嫌悪きにより法どのゝ客間を避けて居られしが漸く立てあしが傍杖打ゑれて相成らずと逸早くも逃出ごし程経て立返り見れば師の坊は熟睡の体綿安心を致しましたが御坊の目を窺され、偖へ文「ウーム何ぞや相「ハイ貴僧何ぞや、ぞやアどぎいません折角お出でに相成りました法殿へ対して何と思召してアノやらな振舞をなすつたるか彼の君柔和なるに依て避け玉ひしが貴に御痛はしく存じました文「ハヽア夫はどうも、我れアノ節何となく心地悪しく相「モシ〳〵何ハヽア夫はどうも、我れアノ節何とは違ひ大切なる客客が貴僧お心持お悪いからと申して我々とは違ひ大切なる客アノや汚な手荒い事をなすつては誠に氣の毒には思召さずや文「ハヽア左様かな、云はれて見れは所公お悪かつた、併し心持の悪

い時には人の頭を叩くのが一番宜い、夫では以来は貴様達の頭ばかりに致さう」相「是は怪しからん事でどざる、何は頭れ御伝に御出で進ぜませ」文「ウーム、明日参る事に致さう、其晩は眠まふ熊したが翌日に相成り改めて文覺御伝に参られましる其後佐どの大の信者に相成り御通ひに相成らせられるは夜陰深更に相成りし時を圖り、或る夜文覺佐殿に申上げるは叛逆僧申上るまでも候はず其の者面より朝廷を守護し奉つり四海残治光る職分は源平兩家に相限り熊中平家よりは源氏の勢ひ盛んにてありしが去る頃より太政入道の勢ほひ頗ふる盛ふ相成源家はあつてなきが如く是ぜ待賢門の賢門の戰ひに御痛はしや下野殿悪右衛門督の謀叛に與し乙び玉ひしより一天四海を清盛の掌中に帰したれども如何にせん彼の人悪逆無道にして奢り増長なし今や宿運已に盡きたり、相續いたすべき小松の内府は日本に相

為せず、只々表に慈悲を旨やいたし佛法にのみ帰依して在せしが今や発じ玉ひたり会弟宗盛はじめ数女あり乙いへども云ふにも足らず世を治むべき器にあらず平家の滅亡近きにあらん御遊は大兵熊者宗頼等しく驍に猛戦れ益々御遊を相するふ左りは大日大聖不動明王右は孔雀明王の御眼人の果報我知り日本國を照し見る事掌ろの中にあり乙く〳〵叛謀を起し平家の邪道を誅戮なし又國の司乙もなり玉ひて朝廷を守護いたされて強るべし何乙て沈黙いたし玉ふべき時節にはあるべからず時は得おたし失なひ易し漢書に曰く、天の與ふるを取らざれば却つて其の殃を受く時至つて行なはざ是は却つて禍ひを受くといふ事あり、急ぎ玉へ〳〵と勧めたり、兵衛佐殿玉ひ、アヲ怖や恐ろしや、頼朝どもが何とてをばかりの大望を起さん誠が身勧勧を蒙むりしを池殿の情に依り世に命

を助けられしゆゑ斯く島守に相成りしも此上もなき平氏の御恩を思ふのみ恩を受て之を報はずんは鬼畜に等し、如何でか弓矢を取り把は昇る如き平氏に対し向てれべ紅が夢にも左様な事を思ひたは身首五所に乙所と相成申ん、斯く致し姫を渡み佛に仕へて父の善提を弔ひ我が後生をも助あるべし悪執我が執を存せんとせ三途の苦悩免れがたし御邊は善道に導ひく聖ところ覺ねしに家恐ろしき事を数へ玉ふ大悪魔法の所為なるか世の中に絶て望みは候はず唯法華経を渡補なし後世を願むより外他事も無之と真事志やかに陳べられた、文覺膝を進め文「御邊の遠慮人にとり守れ愚僧改ためて見せべき場有之是れ見玉へと懐ところを極さぞ取乱したるは白き布も丁然とな せし古びたる中より一ウの髑髏恭々しくぞ捧げたり顔「這は御坊如何なる物と思ひしに人骨ふてはあらずや、是ぞ如何にいた

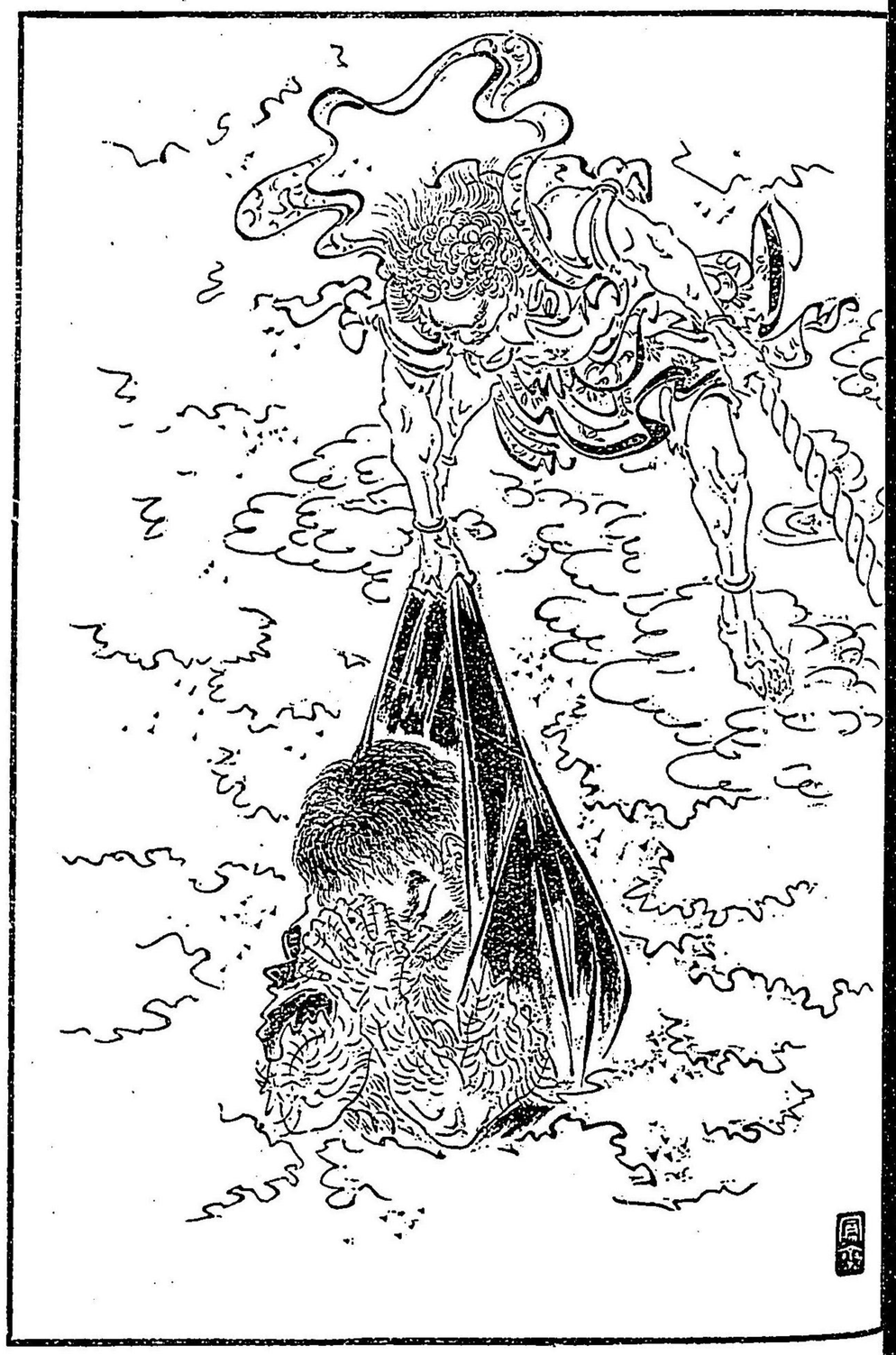
し候文「フヽ、御邊知らずや、是ぞ故下野守殿の御首にて候なり我れ何事して平家を倒し奏ろへたる源家を延さんと存じ那にある中禅々と心を砕き黒谷の法然上人に従ひ法皇の御所へ推参いたし説経いたし奉つりたり、見上げ奉つ是は一天萬乗の國君たる尊き御方も平家の為に世をせは免られあるに甲斐なき御有様了チ痛はしやと存ぜしより何事いたし我が素志を奏し奉つり其の入を得は世に出たし奉つらんと存じ、或る時聊か の隙あつて龍顔ふ直近ふし有難き勅諚を賜はり、假に宣旨を賜はりしも遥々伊豆の國へ下向をいたしなむ人や疑ひ御邊に近づく事も叶はず推して近附かは御邊の為ならずと存じ心にもなき法皇へは不敬我働らき禁獄をせられ此の國へ配流仕せ附られしも皆世を歎堂く計略なり、我れは何として物にや狂はん斯く致さ れは世人は疑ひを晴すこと叶はず开を御邊は来た

疑おひ玉ふか斯の如き下野殿の御痛はしき姿にはなり玉ひしなり君は何とか思ひ玉ふと熱涙ハラ〳〵と流し法どのゝ前へ寄へ我せて差置たり、頼朝は之を見てこワこと笑を含み頼「フヽヽ、如何にや法師、我を何とか思ふ、縄で来れた木偶にはあらず、斯はかりなる場の持参なし、親子の情に寄せて我を立せんの心掛らアチ忘はしき場なりとて手にだに偶れず泰然自若と致されしと、流石武家天下の元祖と後にとろ仰がれ玉ふ大度量文覺冷たき汗を流し頭を擡げ法殿の御魂を見詰て暫し無言で居りましたし

第十二席

文「如何に法殿斯くまで我が意中我包まず明らさまに申上しに未だ御疑ひの晴をざる意と見ねたり我等已に御邊をして天下の權を握るべき英雄と見てありしに依り屢〳〵危難を冒し當

國へ流され金よ其の器を見届けたるに早く大願を起し我が願ひも成就いたされるやう計らひ玉へ、とはかりにては未だ御心に疑ひもあらん勿休孟くも假の院宣までをも賜はつて猴と再たび懐中より恭々しく取出だしたる八重に包みし白布より出だせし紙幾推載たき法殿の前へ差出だす、法殿一足下り法「ハヽ、這は忝じけなき資僧の詞、去りながら我れ一應合點参らざる事の條資僧大願とやらは如何孟る事なるか、又假にもせよ院宣を賜はりし手續きを承たまはらん文「さ是は我が大願といふは餘の儀ふあらず御邊も知らるゝ如く高雄山神護寺再建の志ぞし は深くは猴へども平家の一門更に之を省りみず其の無道言語にも盡しおたく然らは御邊を世に出だし早く造營の議を相頼み我が願望を果さんと存ずる頼「ウーム、今も申する通り、いとも尊とき聖かは知られども大内へ参られし手續きは如何ふいた



せしが文「如何にも其の事に付て一條の物語りあり、為々御返も知られるであらん馬谷の法然上人法皇の寵ろへさせ玉ふを御療はしく存じ祈々参内を致せしに愚僧度々随行なし剃つさへ前の字相皇太后宮の權太夫兼能といふ人は我が為には面かなる親戚にして無々勤王の心深く愚僧の心も能く辨まへ共に朝廷の衰ろへ志を回復なさんとて互ひに機密を語りし間此の人の御取成し私以て勿体なくも法皇の勅詔を賜つて候」頼「ハヽア左様成たまりて其し大ひに安堵せり、イザ院宣を拜し奉法らんとて求ちを正し三拜九拜をなす、文「驚大きに喜ひ文「宗頼再し き御遂に院宣を御渡し申し愚僧満足ふ存ずる、就ては此の大願成就いたし候ひし時ふは前にも申したる神護寺へは何をか寄附いたし王ふ」頼「空れは我れ義兵の戦に際利を得て君を安きに置き奉つらは一國二國も快よく寄附致し申さん文「成ほど易ま

しき言葉、さりながら人として完分望み足りし時は又夫々に藏へも安く自然に前物を履むもの稀なり、御邊と左源なる道に背けし事はあるまじとは存ずるが只今此の處に於て寄附いたすといへる一書を我に渡し玉へ、扨どのエウコリ笑ひ顏「如何にも承知いたしたり、請に任して遣はし申さん何地が宜しく候や文」然らば丹波國にては新庄本庄宿部宗津、紀野、播磨國にて五箇庄山城大和にて三ヶの庄十三ヶ所を寄附候へと新抵硯を突附る顏朝心構て候とて其の所に於てさら〳〵と認め、庄れを、印形を和にて文覺に賜ふ、文覺謝らく見詰てありしが高らかに笑ひ文「備も〳〵御邊は適もれ大度畳来た一ヶの庄をも手に入らざるに日本國を掌に握りし如く心得我が願ひに任せ十三ヶ庄までも賜はりし段返す〳〵も天下を治むべき人、君を置て豈外にあるべからず、アヲ嬉しく候、顏朝も同じく莞爾と笑ひ顏「御邊も又

大膽なる人かな、父下野守の嗣跡なりとて何處の人の頭なりしか長らく休めて居られし事誠に不敵の擧動且此の院宣やても左の如く眞事法皇より賜はりし者とも覺えず銘まで我を小兒の如くに軽しめんが、何でう偽りに院宣を賜はるべき謂れなし左樣にては猴はずや、一言一句文覺の胸を貫ぬき自然と備はる御威光は不敵の法師も頭を拾げて居る事叶はず思はず夫へ平伏なし文「ハヽ天下は宏大なり、御邊の眼力驚ろき入て猴、我れ御邊を試し其の次第によ在は直にも那に上り先に申したる通り光俊れ手を延て改るめて院宣を乞ひ受け申猴、御安堵あれと陳べられるを頼「イヤ〳〵御坊御身來れ勅勘を許宣れず如何に致して那へ上り玉ふ文「されは然に一ツの手段ところあれ我が塔ず旨をとくと御覽猴へとて其れ夜は別れましたるが其後深夜に至り兩三度會合なしさま〳〵評議のうへ文覺國中へ觸廻し

るるは我れ等此度入定いたし御佛の御前へ參り千手經を誦すべき御役を仰せ附られたり、然るに依て來る二十六日信徒の衆ら參拜致すべしと諸所へ傳へられしに依り各々此所、彼所に集まり甲「偖も尊とき事哉、名古屋寺の生佛極樂淨土に獵り越し阿彌陀如來の御前ふて經文讀誦の御役を仰せ附られし趣ひき、了ず貴とき事ならずや乙「されは、入定といふて如何なる事を致すのである甲「左樣樣に文明殿に承れまはりしに七日の間安養淨土へ參られ、經文果つれば衆生濟度の其の場に再たび此の世へ御戻りに相成るよし乙「夫は一段ゆゑしき事なり、イデ當日に相成らは拜み奉つらんとて待たる暮明善女遠くハ千里二千里の在方より來り、名古屋寺の門前宛然市を塔すばかり、扨此方は兵粮の用意を充分ゝいたし方丈の裏手にありし庵室に三方を壁に塗り一方に口を明け鍋床を拵へ相照文明の兩人に申附

け我れ此の一方の穴に入定いたさは彼等両人入口を閉し外より鎖を差し一七日相待し後、穴迯口にて鐘の音致さは明けべき旨とて申附られる、両人畏こまつて御受けに及ぶ、彌よ今日暮れ方の時入定いたすとの事なれは数多の人々押合ひへし合ひ我れ先にと供物を捧げ華を手向け口々に南無阿彌陀佛彌陀佛と唱へ庵室へ来つて見れは繩床にて文覺結跏趺座をなし大日迯印を結び眠れるが如く小者に彌陀佛を唱ふる相照、文明の両徒弟は鐘を鳴らし是れ又南無阿彌陀佛と相唱へる、此の時文覺一同に向ひ「扨も今日我が入定と承れたまえり信徒の方々無く来玉ひたり我れは是より安養浄土へ罷り越す最早時刻も来り候により是ふて別れ申さんといふかと思へはスワクモなり立上り後ろの方に捩たりし穴を除んで飛入れは群集思はず聲を立て、すす哭とし有難し上人身を苦しめ玉ふといふも我々の苦限

を救ひ彌陀の浄土へ導びき玉はんとの本願南無阿彌陀佛彌陀佛と唱へ異口同音に唱へ穴の口を除んで各々寒餓を堪まず投げ込れました、相照、文明は早くも穴の口へ戸を鎖し鎖を下し群集逐散の後寒餓供物を取片付しが駿河守の一間へ通ずべき一の溝を地の中は其の穴より已れが休息所の一間へ捩て置ましたから是よりスル〳〵と抜て我が間へ来り旅の支度をワコ〳〵に整へ夜に紛れて當所を出立なし妻夜分ふ上京を急ぎました、世の中には随分人を馬鹿にした事をするものがあるもので決を知らずに信ずるものとろ笑止の至りであります、扨も文覺日數経て此度御移りに相成りました新都福原の法皇の御所へ近づき如何にして忍び入りしか前の家相皇太后宮の横丈六先師の方へ参られました、前にも辯じました通り親成のみならず、今生平家の場に垂をせばめられ官職を

剃取られ有るを無きかの如くに扱はれ世を恨んで居ります
先能へ對し顏朝の人と場の一伍一什我申去入る先能大きふ喜
び先「イヤ御坊其方の辛苦感ずるに餘り餘り上にも今は打籠
られ朝菜平家を恨むる心猶のみにてあ座せらるるに此の儀奏
聞に及ばゝ龍顏定めし濫はしく渡らせられん是れ朝廷の御運
の開く時節到來御身は我が邸に忍び玉へと深くも文覺を隱
し密かに奏聞を遂られました、法皇の御感斜めならず先能に仰
せ附られ、忝じけなくも院宣を賜はりました、先能文覺へ右院宣
を渡されしに依り、文覺ろに涙を浮め有難ぶり奉つり先能
に別れて密かに伊豆へ下向をいたし約束の如く七日目の暮方
ワ頃ほひ以前の我居間より入定なせし穴の口を望んで來りし
お如何なる事かと相照、文明始め信徒の方々鐘の鳴るのを待つ
て居る時カシ〳〵カシ〳〵扨は生佛の御返り遊はしたりア

有難や之隨喜の涙を流しました方とも隨喜の涙といつて等閑
の涙を流した譯ではない口々に念佛我唱へて居る兩徒弟は鍵
を待ち鎖前を開け、戸を取りし事ゆ爲、文覺悠々と檀上へ上られ
ます信徒の者猶よ有難く存じ伏拜んで居りました此の時文覺
高らかに文「如何に善男善女愚僧滿願な果し、今こそ再たび歸院
いたしておざる」信徒の諸代は想る〳〵勸み強で信「想れなが座
生佛孫へ伺ひます安養極樂淨土とや座は如何なる所でござい
ましたら文「それは云ふ云は差ず、語るに語れず只々香氣參
くそして郷方にも御佛此方にも御佛群集なし天女音樂を奏し
惡僧を迎へられしに依り、千手經を讀誦いたしたる所如來も共
々讀誦遊ばされたり、我ご經文ふ導びかを遊る者は正に極樂往生
疑ひなし、彌陀佛〳〵と唱へたり、信徒の者は彌ま喜び殺拜
いたして立歸りましたが當今の人は斯孫な痴けた事に偽はら

れる者は婦女子といへども恐らくありますまい、其の頃ほひの在郷の者は誠に氣の毒なほど正直ゆゑ斯樣なことを一人として疑ふ者もなかつたと見えます、扨も其の夜文覺、頼朝卿の御座敷はされる所へ参られ對面をいたし都に於て改めて院宣を賜はりし趣堂きを賜語る頼朝大いに喜こび嘸ひ洗手をいたし文覺を上座に直し其の身へ下り膝まづき院宣を推頂たき故見いたされまし為其の文に曰く

早可レ進二討倩盜法師幷一類一事

右君子不レ直入者令二民成一レ怨奸臣在二子朝一者賢者不レ進彼一類者密非レ忽二諸朝家一失二神威與一佛法一既為二佛神之怨敵一亦為二王法之朝敵一仍仰二前右兵衛權佐源頼朝朝臣一宜下令二進二討彼輩一早退二怨敵一奉レ安二宸襟一上

実俊二院宣一執達如レ件

治承四年七月廿日

散位兼左少弁藤原

従上　前右兵衛權佐殿

第十二席

前田に辯じましたる文覺始め義朝の賜騎なりとて名もなき者の將を持ち頼朝を勵まし義兵を揚空せんとなしたるに部つて頼朝の場めに一言ふ破られましたお實に頼朝公などは日本の五軍の名將といふ位る第一番頼朝公、第二番に足利尊氏公、第三番に織田信長公、第四番に豊臣秀吉公、第五番に徳川家康公、此の五大將は武家の五名將といふ空らで有ども頼朝公は平家を進討なし日本總追捕使に任ぜられましる時文覺上人を使として父義朝卿の首級を尋れられました、是は敵の待賢門の戦ひ敗れ尾張國野間内海に逃げ来り家人長田庄司方にかくまはれてありしが庄司父子利慾に眼くらみ主人義朝を浴室に於て討ち取り平波羅へ差出たし恩賞に預かられんといたしましたお重盛卿

却て長田父子の無道を責め両人誅戮せられ義朝の首級は泉水に洗られましたが、弦るに甘五郎といへる義朝方へ出入いたせし商人がありましたお此の獄門を見て痛はしく存じ博士判官義成に訴て何卒此の御首某しに賜はるべし私し義は幸来下野孫に御恩に預かりし町人なれども長く曝され逆賊よ叛謀人よといはれることの御痛はしく存じ、せめては御首を隠し奉つらんと存ずるとて嘆かれしを義成伝れが孫隊の志しを感じ懇々伝波羅に取成し賜れが願ひに任して首級は遣はされました、甘五郎大いに喜こび我が菩提寺に葬むられ家臣鎌田兵衛政清とて是を又義朝ユ直近せし豪傑壬人と共に泉水に掛られしも共々ユ申受埋葬をいたした頼朝御々にして文覺より右は延き孫まは り大に喜ぶはれ早速掘出して赤るべしとて申附られました、文覺は鎌倉直近比梶原源太景季を使おへ甘五郎を密内にして掘出し見れは義朝の骨には赤銅の札に源義朝と記され正清にも銅の札を附られてありました、直ちに茶毘の手箱に入れ錦の袋に包み上人自から首に掛け正清の頭を檜の木の桶に入れ白布の袋へ入れ弟子文明に持たせ鎌倉をさして片瀬川まで掛りし所早くも此段鎌倉へ注心いたせしに依り、和田北條をはじめ諸大名出迎ひ鎌倉へ密内を致す頼朝卿は上人へ御面會の節末席に下つて文の白骨を受取られましたお一字を建立致し法華寺院と稱け手厚く佛事を營なみ大報の禮を布ふしそいよ、是れは後の御話ですお事の序でに辯じて置仲、叔も頼朝は法皇の院宣を賜はりしより一刻も早く義兵の旗を擬がへさんと なせ去お今や四海を併呑たし指たに差すものもなき平家の門を對手に致さんといふ容易ならざる事なれは義々信仰いたす伊豆山に国姓坊の阿闍梨といふ若僧を忍び深く隠れて在

せし我法どの當國へ流されし始めより祈りの師と致し居られけれは吾函如何にあらんとて直様安達藤九郎を以て招待をいたされ阿闍梨は何事やらんと取急ぎ参殿れ御對面になりし時法殿阿闍梨に向ひ「法」きて御坊急々く御招待申せしは餘の義にあらず我れ勅勘の身となる憂き年月を送りしお今はろ世に出づべき時節となつたり汝を如何にといふに此度法皇より平家追討の院宣を賜はり是れ則はち我が為に開進を祈り玉ひし御坊の力なれども妥き所と存ずる夫に付殘り惜きは親父下野守は為に法華經千部轉讀の願心を起してより已に八百部の功終つて今二百部を殘せり之我滿空んとする時は時日を費やし此の事編れも致した時には由やしき大事なりさるとて年来の宿願を果さずして合戰の企てなれは報恩の志し空しくならん進退窮まれり如何に致して宜しからん」阿闍梨承たまはり暫ら

く打案おて居望しが「阿」此は嬉しき事を承たまはり候もの哉君の大願成就する時節到来其の故如何とはふふ八は認て賜の大数を申し成就するは此なり君只今の御詞に八百部を已に讀み玉ひしよし、いとも景先き宜き事にては候はずや類「ハ、ア八は何として宜しき此なるや「阿」されは釋迦如来は八正慈悲の門より出でゝ八相成道の窓に入り八千の壽命を保つて八萬の法藏を説き玉へり衆生本覺の心蓮は八葉の形ちなり一乘妙法の首題も八葉の蓮なり八角の轍は極樂の瑠璃を空め八德の水は寶國の金砂池に湛へたり宗に八宗、戒に八戒あり、天に八天、龍に八龍あり、八福田あり、八解脫あり、法華に八の巻あれは八年に解きて八軸に調巻せり、薬王菩薩は八萬の塔婆を立てゝ脇我妙法蓮華經を焼く妙音大師は八萬の菩薩と来つて耳を一乘に傾けるり、況んや又御先祖貞純親王の御子六孫王の御時武男の名我取て始

めて源氏の姓を賜はりし以来經基、滿仲、頼信、頼義、義家、爲義、義朝佐殿に至つて八代なり、故伊豫守頼義れ君は三人の男子を三社の神になぞらへ奉つり嫡男を八幡太郎義家次男を石清水次郎義綱三男賀茂三郎義光其の中ふ佐殿正嫡として八幡殿れ後胤なり日本國廣き中に當伊豆國に流され玉ふ給て朋東八ヶ國といふ文覺は上下の往復八日に致して君に院宣を渡し玉ふといふも是れ尤とも不思議ならずや先にも申した通り八百部の功終りて今しも義兵の旗を上げ玉ふは此の上もなき宜き時ならずや我れ古ふに戦ひの手始めは當國より目代八牧判官を討ち玉ふべし、さすれば東八ヶ國は悉くの中に招かざるに来り集めざるに御味方と相成らんと判すでしく説かれたり、佐殿の嘉しげに笑み玉ひ頼師僧の数測は神明の託宣にや在すらん當國には伊豆箱根に五願の状を捧げ八百部の轉讀

數々供養あるべしとて飲食に飽き米八石衣服に美綿八疋臥具に延桃八品、醫藥に様々れ藥八包あり、又上四種の佐藤の上又四種を添へ砂金八両檀紙八束白布八反錦八領郡合八種の布施なり斯の如く整のへ先考の善提に回向し、子孫繁榮を祈請あるべしとて門姓阿闍梨を頼み遠はされたり、尤とも名將には必ら ず名僧が傍はらにあつて助け玉ふと見にます、則はち頼朝卿には文覺幷びに前申上た門姓阿闍梨、木曽義仲には太夫坊覺明、判官義經には武藏坊辨慶、近くは豊臣秀吉公には安國寺恵慶、家康公には南光坊天海其の後澤庵禪師など出で天下の政事を助けられました

第十四席

扨も佐どの當國へ来りし始めは伊東次郎祐親を頼んで在せしお祐親在宮の砌り其娘に手を附け男子を擧けしゆ名喜んで在

せし所へ祐親立帰り此の事を承たまはり大に怒り佐どの流人の分際にて人もあらんに當國守護たる我娘に懇を通せし段不届の至りとて其の公達を真の谷川へ打込ませ其後扶助いたさりければ佐殿大いに怒り信不通になし同國北條ふ参り四郎時政を頼みて在しましたゝ時政は大度量の人にて殊の外草歌いたし我が娘両人を侍づけ居らしが佐殿は御娘政子より妹娘時子の方お容貌美くし殊として此の婦人に懸想を致し艶書を認ため藤九郎盛長をして届けさす時子憎くからず存じ日を約して返書を遣かはされましたゝ佐どの大いに喜び其の日の至るを待ち玉ひしが姉娘政子は容貌ところ妹ほどにはあらずといへども天性備はる利発にて在せしお妹より佐殿の艶書のことを聞き嫉ましく存じ藤九郎盛長を密かに招いで語らはれましを盛長は元武勇の軍人にて主人佐殿伊東の方にあつて婦人へ

の愛に溺れ頼み初たる伊東の一方に居る事も吐はず當府へ来り又々婦人に事とり時政の憤どゝなりに遇ひたらんにも全く閉蹇束なし、時子と違ひ姉政子は發明なおら容貌美ならず元来色好みなる我が君なれど一二回にて思ひ留まり玉ふらんさあらは此の義時政にも偏れず君も謹慎遊はすべし、何事も君の御為めとて忠義に厚き者ゆゑ時子の寝屋へ誘なふとて政子の部屋へ導びかれましたゝ佐殿きは知り玉はず懇れ玉ひし時子と今夜は語り明さんとて盛長に連れられ参り部屋へ這入り盛長を退かけし時政子恭々しく進み伺ふ義て用意の酒肴を出だし元公に懇意いたし奉つりしに佐殿今さら間違ふたりとも云ひ難れもじ〳〵して在せしが政子の取為し言語の様子を見れば又自づから一見識あり一言一句として覺悟面に溢れしあは佐殿聞在き契りを結び玉ひ暁きどろに別れを惜んで又の仰せを約し

我が居間へとり立戻られまして、理はりなる哉此の政子といへる方は一個の女丈夫にて殊には隙れたる大膽常に頼朝卿の御側らにあつて萬事を助け天下一統の後は御基府に仰がれ玉ふ頼朝卿薨じ玉ひし後は其の子頼家實朝両卿を助け將軍は名のみふして萬事此の婦人が天下の政事を司きどる人呼んで尼將軍と尊敬なし鎌倉開興乃舊臣等一人と志て頭を擡げる者もなく此の縁に連れて時政は外戚の威に倚り專はら權柄取られまして婦人の賢しきは始終を全たふする事無はず後には二代の執權義時殺害頂なし動もすれば忠良の臣を誅せられしよし此の後の話にて頼朝時政とは別して御仲も睦ましく是と申すも時政容易ならざる豪傑ゆゑ頼朝の心にては娘の縁に連れ銘まで我を助けさせんの思召し、時政は頼朝の大才大気量のよし此の人を能く保法いたして居らは吾が家運を開く時節もあら

んとて益々尊敬をいたし居られしに依り頼朝院宣を賜はりし時節一番に時政をお召しと相成り一位一件を物語り、我が刀には及びも附ざる事萬事宜きに計らへとお頼みに相成る、時政孫の外戚と申上げるは時「恐れ」ながら斯はりなる御開運の時節に一刻も猶豫し玉ふべきにあらず、其し申すまでも候はず東八ヶ國は大名小名數多く其方々皆故下野守殿の恩澤を蒙むりし者ゆゑ必ずに会ゆ平家の敵ひ洪大なれは已を捨ず從つて居るもはいへど君お招き玉ふもあらは直に走せ参るべし近は上総國の住人介八郎廣常、下総國には千葉介常胤、當國には土肥土屋、岡崎等の入々武藏國には畠山庄司重忠子息次郎重忠、房州には三浦介義明等速かに御味方に参らん、其中義明、廣常、常胤此三人御味方に付は何の面か候はん早く御招おつて然べしとて菊間源吾、安達藤九郎両人に仰せ付られ夫々手別けを致し御招

ぎあらせられる入々くゝ為々平家の惡逆殘憎み居りし來ゆゑ忍び〳〵に御受けに及ばれる、さりなむら當時流人の頼朝ゆゑ表五ては我が家の大事、平家に觸れぎる[illegible]やうす配りを致す事ゆゑ持々しく軍勢は集まらず頼朝時政へ對し仰せられけるは如何に時政御身の勸めにより我れ義兵を起きんと致すといへども人〻疑ふて容易に來らず之に依り我が運を試さんには當國の目題八牧判官義隆を討ち取られん、さすれば閑東源氏集まる事必定なりと仰せられ時政大きに喜び君の御男氣御先祖八幡殿の再來とて金よ用意に及ばるる是ぞ治承四年八月三日なり宗人進々く來る其の中に故下野守の猶子に近江國の住人佐々木源三秀義が子供等平治の亂には下野守に從ひ平敗れて後諸所に忍び居られしが此度の事を傳へ聞たまはり進々く來る猶男太郎貞綱は下野宇都宮にあり次

男次郎經高は相模れ波多野にあり、三男三郎盛綱は同じく源谷にあり、四男四郎高綱は都にあり、五男五郎義清は大庭三郎が妹婚にて相模にあり其の中にも高綱は心剛にして志恵も深く兄ふる隙りし入なる望しが其れ節都吉田邊にて伯母に從ふて居られしが知る人あつて平家に仕へよと勸めらるゝされども父秀義は故下野守とは只ならぬ間柄代々一門の好みを結びしものなれば假令餓へても平家の祿を食はじとて前にも申しぬる通り伯母の許にありしが伯母とても富る家にもあらざれば高綱往來へ出でゝは人の荷物を運び或は走り使ひなどいたし世を慕しして居りしに佐殿の事を聞しより矢に昇らんばかりに悅び伯母に早々暇を告げ鎌倉に來る懷中に路用は手薄急ぐとすれど出に任して江州守山宿まで來る此の太刀を打込み都を來明に出で足弱に勞れを生じ野洲河原へ出でたる時に向ふの方より草鞋

置たる馬を負ふて一人の男来る百姓とも見ゆる者なれども馬を中々逸物ところ號にたり、高綱進み出で高「イヤ夫なる御人御身は何處の人にて何れへとろ行給れるぞ○「ハイ私は栗太郎小脇の八日市へ行くものでおす高「ハヽアシテ又何にて蒲生郡小脇の百姓名なるか○「ハイ、私は御前に名前を名乘た處が詰とかいへる姓名なるか○「ハイ、私は栗太郎小脇の八日市へ行くものでおす高「ハヽアシテ又何ちんぞやうないか金殊れ前さんは私の名前を聞て何にさつしやる高「ウム尤もの不審其しも八日市へ是より羅生越す者だお願まくは同道をしたく存ずる馬「ハイ旅は道連れといふから参つても宜うどざいます、私は善助といふ者です高「マア夫は結構の名前だ善助といふ文字は善と助くる、何と此の川を渡らんほどに其の馬を我等に貸し玉へ善「イエ往ません是から市へ参つて澤山重荷を負はして返るんだ夫だにより私も疲れるお馬を勞はるから乘らんのぞや、又幾ら畜生でも然んな無理

な仕ひ方をもちやア殺生ふたなる丁高「ウーム是ほど其しお願ひのに貸んのか第一此方只借りやうとは申さん安かの賃銀を遣すす其の金以て是なる馬へ食物を澤山に遣はさは別段罪にもなるまいと思ふ強て貸さんとあらば武士道が相立ん空太刀れ柄に手を懸け脇ろ附たる輩ほどすさまじけれは善「アーモシ只貸さんといふはかりぞやアなれば川を越すだけならはお貸し申ません、併し客人の乘るやうな馬其は跛て居ないぜ高「ヲヽ夫は心得て居る然らは川を渡るだけ貸し呉へとて馬に打乘りザブ〳〵〳〵野洲川を打渡り綱手綱を繰り綱の腹帶面親指の股を差入れ一編りして平逸撒に走せ出だす、善助は馬ふ付て涙り来り受取らんとせしを持一撒ふ馳け出だせしゆ忽大犯に驚ろき善「ヲーイ〳〵馬を返せ戻せと呼はり宗から追掛る、高綱尚鞭を加へて走行するに高人馬の癖なれば股爪堅くし

てなづまず篠原堤乃邊りまで来ると善助は大聲を揚げ善「馬盗人よ〳〵と叫びけるに、高綱大いに驚ろき我れも一個の武士なり今や大事の身の上なるに徒づらに盗人となつて捕はれん事残念なりと思ひ乃れは馬を留めて飛下り善助の来るを待ち受る、間もなく善助は息を切て走せ来り善「アヽ家人既むれにも程とろあれ早や馬を返し玉へといふ時高綱心中に今然に於て馬を返せば急ぎ伊豆へ着する事叶はず佐殿面に出で玉はゝ近江國は我が勝なり其時に善助の後生を吊らひ遣はし不便なれども今此の所に於て切殺し馬を取らんと決心なし高「イヤ之ならば馬を返さんといひたるなら一切スラリと引抜きぞま近寄る善助既真甲より切り下げ血煙りを立て倒れる所を足を上て前なる濠へ打入て其儘高綱荷鞍に乗て鞭を加へて武佐宿まで走らせ然に知る人より鞍を借り受け夜を日に継で下るほどに馬も屠竟

の逸物なり早や乗り馴れし事ゆ忽に更に泥む事なく伊豆國へと下りました、叔早々く佐殿に見参なし、下向の次第を申上ると、佐殿大いに喜ばれる、是より高綱人を遣はして兄弟原を呼び寄せけるに太郎定綱は下野宇都宮より馳せ参り三郎盛綱同國波谷より馳せ来り、波多野より馳せ来り四人佐殿を守護し来つる、然るに五郎義清は大場三郎が妹婿ゆ為其の縁に引かされ或は御味方に来らざるやも知れ難しとて是のみは招かざりしは高綱の用心でどざいます、叔是より金よ頼朝旗上げに及ぶのお話し

第十五席

備前田に辨じました通り、佐殿の勢ほひ進々く盛んに相成り治承四年八月の十七日八敢判官義隆秋手始めに討ち取るべしとて夜討ちの大潮北條四郎時政嫡子宗時次男義時佐々木太郎兄弟

四人土肥土屋岡崎真田懐島平權之頭始めとなし八千五騎悉く
に押寄せ充そも此の戰さばかりは頼朝お開運になるか或は滅亡を招くかといふ一世此大事であります故一味方勝
利に和成れは城に火を懸け火の手を上るを待て在圖とし敗軍
に及は使者を以て言上いたすさすれば法殿自殺を遂すべしとて
時政契約をいたし戰ひを仕掛けました所開運の時節なるか戰
ひ元分に勝利を得當國の住人加藤太光朗加藤次景廉二人
共大の働らきを致しまして此の兄弟は能國入道の四代の後胤
にて大將八牧判官代景廉一騎打に及び終に首級を上られ其の
外開谷八郎などいへる豪傑を討ち取り凱旋をいたしました、扨
るに兵衛佐頼朝謀反たし義隆を討ちし逆むき國にられし事
由を大庭三郎より早馬を以て知波羅へ注進に及ぶ又伊豆相模
両國の侍佐殿に随身をいたすもの二百餘騎に及びましたから

太庭三郎景親は武藏相模の輩を招き相随ふ人々舍弟股野五郎
景久、長尾新五、吾同しく新五、八木下五郎、濱野の五郎、藤光名源八、荻
野兄弟、川村三五郎、曽我太郎、佐々木五郎、渋谷庄司、山口瀧口三郎
同しく四郎、稲毛三郎、久下權之頭、熊谷次郎、岡部六彌太、渋間三郎
笠間三郎是等を宗徒の人として三百餘騎家の子郎黨合して三
千餘騎八月二十三日大庭三郎を偽大將となし石橋の坂に押寄
せ谷を前に充て陣を後ろに致して陣取りまた居る、此の時大庭三
郎は大將分を本營に據め弓杖をつき大音に呼はつて三押も平
家は板武天皇の後胤港原親王の御末にして代々將軍の宣下を
賜はり朝廷輔佐の大任我歌むり天下の逆亂を鎮め武勇の名他
家に勝れ能中太政入道殿は保元平治の兇賊を誅し夫より朝廷
の御用ゐ勝れ其身太政大臣に昇り宏大なる御昇進一族家門谷
々高位高官に昇り一天下の萬民雑まつて恩澤に與からざる者

ない、草木の風に靡くが如く南海西海の辭に至るまで其の威望に從がふ東國北國の民何ずゆるがせに致すべく鶴るに流人類朝世ろの人を特み平氏に弓を布かんと為す條實に蟷螂が斧を上げ龍車に向ふに等しく旁々長の武門に名譽を得君の恩祿に要子家人を扶持いたす、此事を一刻も忘るゝ人にはあらずといへども其し不肖なるから從大將の幸ゆゑ申し入候、先分功名手柄を現はし君恩を報じ御恩に報ゆ、候へとて味方を勵まし戰ひをいたしました源氏方も小勢とは云ひながら佐殿大事の戰きゆゑ必死を極めて激戰を致されしゆゑ両度まで勝利を得たるが家は衆に敵せず小敵を大敵の勢と古人の金言理はりなる哉、入れ代る味方のあらざるに依り大に疲れ疵中目ざましき働程きを致せしは佐々木四郎高綱逐ひ来る敵を七度まで引返し破られる其の中夜に相成り戰ひ稍よ難儀に相成り岡崎四郎

義實の嫡男真田與一義員行年二十五才祈節流の病ひに打伏せしも佐殿の大幸ゆゑ推して推参いたし夕駿と稱けたる猛張の荒馬に敵の同勢三度破り屈竟の兵千三騎を切て落し大將大庭三郎か舍弟股野五郎を討たんとて敵の同勢伐討ち五て〳〵石橋山より来嚙峠を駈け廻り股野五郎景久に出で遇ふ景久は其項開東無双の大力士宜兒敵どぞんなれと反ひに名乘り馬駈け寄せて引組み捻ち合ひしを遂に景久を取て押へ首を取らんとする所へ長尾新五吾といふ者来り必つの後ろより組む義員は後ろより乘る新吾孫合ひしを両馬の間へ落ち金剛力を現だして伐取て三間はかり投げ、景久の首をかゝんと拳ろふて居る所へ新吾の舍弟長尾新五来り飛み掛け鎧の間より二刀刺し遂ゆゑさすが無双の豪傑も遂に空しくなられました、所へ真田汪郎覺丈三家安来り是は又主人と共ふ討死をいたす後ふ佐どの之を

聞し召され痛く歎かれましたが戰ひ鎭まつて後石橋山に一宇を建立なし眞田與一を招られ國人眞田大明神と稱へ居りましたが事は世の人の能知る所でございます、此の戰かひに佐殿大いに敗北なし主從七人土肥の杉山に隱れ大木の洞に相成て居る内に入り玉ひしに大庭股野梶原親子來り諸所を探索いたし遂には此の洞木とろ怪しけれとて大庭お入らんとするを梶原平三景時推留めて自ら這入り佐殿は居玉はずと申せしを大庭股野は珠の件疑かひ自から入らんとして梶原と爭論をいたし梶原親子孫て居らざる趣むきを陳べ一場の爭ひになり已に刃傷にも及はんせするを大勢進んで仲裁をいたし双方心打解け龍をきして引返す實に佐殿の怪しき事は風前の燈火の如く此時に梶原景時居らずんは空しく討たれたのでありませう、景時は機を見るに鋭どき功珠には佐殿お御痛はしき有樣を見て命を掛て助け奉つ呈ました、されは、佐殿二度目の旗上げの節梶原親子佐殿に此度が度々軍功もありましたが鎌倉殿北條和田梶原とて重く用ゐ在れ侍所ろの別當にまでも取立て諸大名支配の役を申付られ景時の申す事は何なりとも聞ずといふ事なし是れ則はち土肥杉山の九死を助け一生を保ち玉ひしゆゑ閉運にならせられしも皆景時お恩なりと仰せられました、景時は數ひに任せ御舍弟義經君をも讒言をいたす、其の積惡增長いたし頼朝卿怒り玉ひて後鎌倉大名一統とりれ建白により所領を取上られ忍び〳〵に駿河の領地面引上げ何か謀謀の兆しあり其平常中惡き同國の大名等に逢ひ戰ふを仕掛られ敗洲狐ケ崎に於て父子兄弟共を列べて自殺をなし或は討死を致す是は後年の事、扨も頼朝卿一度び頁しも更に屈せず上總國へ渡り分の八郎廣常を頼み下總國へ參り千葉介常胤を頼み軍勢を

將軍催ほし武藏下總の國境隅田川に旗上げをなし味方の軍勢を進々に集めしに八千餘人實に宏大の御勢ひになりました、是は頼朝の力はかりではありますまい、天平家の暴惡を憎んで滅亡を空する時節の參りしものと見ねる夫より東條還を搦根山へ御出でに相成りし時は五万餘人と相成り甲斐源氏の頭領武田冠者一族南部、波多、小笠原、村上、海野、下山、一條、高梨、是等をはじめ二万餘人を引て御味方に參る、平家方は駿河國清見ヶ關へ本陣を構へ金よ軍勢を集りし、に蒲原、興津、由井、富士川縁まで進軍に及ぶ是れ則ち平家方大庭三郎の注進により千萬餘騎惣大將三位中將維盛、副大將越前三位通盛、此の両卿をはじめ侍大將には齋藤別當上総介をはじめ宗徒の豪傑押寄せ來り去も急流の上に陣取いたる長雨の為に水嵩增つて渡る事も叶はず維盛、通盛初先長く祖父入道等の奢りに倣ひ動もすれば詩歌、管絃、今様

朗詠なとを公卿と共に樂しみ美女を愛し晝夜淫酒に長じて居られし人々ゆ君を空しく日を送る徒然を慰さめんとて都より召連れ來りし白拍子等に酌を取らせ遊興に耽つて居りはした是は頼朝も昨日までも流人であつたる事ゆ口にとろ三萬五萬と申すもいへどもさはかりれ軍勢集まるべき謂れなし其上五合の軍勢にて播代相恩の我が軍勢に対つ引く事も叶ふまじ斯く延陣いたして居る中ふは自づか在入心離れ破れるは必定とて鎌まで侮どつて居られしが頼朝一ツの計略を催ほし敵を破りしやいふは名代の水島兩者の計略であります是等は源平盛衰記に委しけれは省略を致します、平家注十万人取るものも取りあへず都をさして逃出だして參る此事都へ聞へし時太政入道どのゝ門の柱に樂書をしたる者おありますの富士川の瀬々の岩越す水よりも

又右大將宗盛の露怖いたされしを聞き落首いたせし者あり

早くも落る伊勢兵士かな

ひらやなる宗盛如何にさわぐ屋ん

柱とたのむ助を落として

是は平家の一門の中に權之亮少將通げ返る時落涙を致したり斯ぬ如く排りしは何れも奈良法師の所為と見はます其の頃の詞に法くそ奈良法師は制する者ぞ出来ないと申しる佐で、是より頼朝卿淡島ケ原へ陣を取て居られる處へ舍弟北郎義經御出でに相成りました、此の御方を幼名遮那王又は牛若と仰せられし京の北山鞍馬寺に人と為り後に奥州へ下り權太郎秀衡の許にあらせられしが兄上旗揚げと聞き推参をいたされ御兄弟御對顔の節義經の凡人ならず軍學兵書に委しきを試し玉ひ誠に代つて他式將に相成るべしと仰せ附られ兵衛佐殿は鎌倉へ入り御所を造營いたし功ある者を賞し別なる者を寄め座らにし玉御幸福とやはん諸國の軍勢集まり来り三洲補といふ所よりは舍弟冠者範頼赤られ義經と列次を立て屢々戰功を現す鎌倉の頼朝卿お全たく天下を握り玉ひたるを信洲木曾縣岸より故帯刀先生義賢の現木曾冠者義仲北國に旗揚げ勢ひ盛んに相成りを征罰に向ひし平家の軍勢大いに破られ義仲其の勢ひに乘じ都へ上り法皇を守護な去天下の權を握らんと欲し、押して旭將軍と號す法皇よ星義仲の奏請を贈み義仲進討の院宣を頼朝卿に賜はる範頼義經の兩大將兄の命に依り宇治瀬田に戰かひ義仲を敗る義仲は粟陣ケ原に於て最期を遂げ全たく頼朝卿帝都を守護する やうになりましたお後西條に落ちし平軍と戰かひ範頼、義經の働らきにて勝利を得られ其の身日本惣追補使に任ぜられまた、偖て源平盛衰記ふ詳に出て居ります

頼朝已に大業を起し天下残掌中に握りしといふは文覺法皇より院宣を賜はり慈と不敬の罪に陷ゐり伊豆國に流され頼朝を勵まし院宣を渡せしに依り豈かの國に斯はかりた功を奏されましたので然らは文覺は重く用ゐ雇れ高雄山神護寺造營も出來寺領も多分寄附いるされしゆゑ此儀終つて終へは只源氏の場にたりしはりでありますが世にいふ義俠と申する性質ゆゑ君平家没落後子々孫々までも絶志鎌倉殿は祝を高く眠らんと北條時政に仰せ附られ罪なき者までも害さんといたす、文覺此事を承たまはり義俠の精神休んずる事能はず三位中將維盛の子に云代御前といへる御方鎌倉へ授はれ罪科に処せられんといふを文覺之我助命願ひに出でるといふ此の談話の第三の眼目であります

第十六席

頼朝卿平家を西海に打滅なし一度び舍弟判官義經を以て京都守護職に任ぜられ勢ほひ宏大に相成り諸人も文武両道に秀でしは鎌倉殿より御舍弟の方隙れしならんといふ噂を承たまはり心を惱まして居られる時新田にも辨じましたる梶原平三景時遇つる八島の戰ひに逆櫓の論より義經と不和なりけれは何ろあれろし判官を悔し事き目見せん空心掛居りし處義經の奥方京の君を仰せられるは平家の一門平大納言時忠卿の姫上にてありしを事はひ縁々に海言をいたし鎌原殿へ梶原の申上げしが真事と心掛玉ひ土佐坊昌俊と云大藤の大將此の者に申附け都へ遣はしたる時却つて義經に見現は空れ、昌俊は已む事を得ず不意に戰さを仕掛け戰ひ破れて武藏坊辨慶の為に遂に討たれました、さりながら兄頼朝と戰ひ始終の勝利あるべき筈もなく又其の身も別して罪を招せし覺にもあらざるに依り鎌倉

下向をなし御疑ひの條々を申開かんとて腰越まで来りし處鎌倉殿義經の鎧櫃入るを免さず其の時認た免て差出したは有名の義經腰越狀であります、されは義經に代つて上京をいたし平家一門の類ひ取調べに参りしを北條四郎時政宣へ著し八方へ觸れ出だされしは此度鎌倉殿の仰せを被むり平家に縁みの深ろりしもの来た洛中洛外に忍び居る越むき左様の者を見たらんには速やかに捕たへ出でべし萬一切向ふた時を切り捨て苦しからず功に依り恩賞を賜はるべし且忍び居る事を知り訴たへ出ずる者は其の罪重かるべし勿論匿まひ置く者は同然免れおたしと觸れ出だせし事ゆゑさきだに長年の間平家の為に苦しめられし洛中洛外の者或は訴たへ出で又は生捕り討取り中には平家往一門にあらぬものまでも召捕られ憂目を見られる事も怪りました、平家は長く權政を取り一門一族も滅けれ

は中々容易に片附ず北條時政とても情なき人にはあらずといへども君命なれば已む事を得ず袈々草を分け花を起し尋ねられる然に東山東樂寺といふ所に阿波坊邸西とて貧しき上人在しけり、慈悲の心深く柔和の性質にて銘まで御佛の教へを守り更ふ禁戒堅く把さず世の中擬つて生佛といはれたり或る日西山祇ノ尾明意上人に招して帰り玉はんとて一條萬里小路を通り玉ふに土門海裕皮の御所の前へ數多の人集まり袈々にひしめき居られしを上人何事ならんと人を押分け近寄て見玉ふ「アーコレ〳〵往来をしろ〳〵見る者多くアれは邪魔になるサア〳〵行け〳〵も數多の武士群集れ者共進ひ仔けるを、物見高きは郡人の習ひとて遂はれては集まり集まつては遂ひ散らされる上人は餘念なく見詰て居玉ふ時に門の中より五六才はかりなる小児、桐竹に鳳凰を織り出だしたる小袖の上に錬り絹の小袖

を打著せ地白は直垂に玉纓を揚て下腹巻五瓦帽子懸して大刀はかり佩たるを男の肩に載せ大路を出で西の方を差して走行く孫子其の小兒は最とも容貌美麗にして髪黒々と生ひ延び肩の廻り我通たる乳母と見たる女房二十四五はかりなるお腰も現はの歩行跳足にて後々後れじと走せ行く孫子上人之をつく〳〵眺め上「ハヽア爲々哉に孫たまはる鎧倉武者か平家の子孫を失なはんとて斯く致す事と見たる星奴も不便は至り誰人の子孫なる御人只今武士の場に逆れ行れしは何人の子孫にあるあ産ん知らるゝならは教へ玉へ○「ハイ左孫でおぎい外と云ひ掛けしお鎧倉武士のいかめしき孫子を見て驚りあつては悪ありなんとて答ふる孫子もなく已む事を孫子其の身も西の方をさして奏らんといたするに二十才餘りの女房併めならず美はしきお終に土をもふみしことも無きとも驚ゆる痛はしげなる風情にて唐後の二ツ小袖にて錬衣の二ツ小袖を打まとひ貌も隠さず耻をも忘れ眼も法きはらし道をも更に知れざる孫子那方へうろ〳〵此方へうろ〳〵叔とろ是なん母ならんと思ひ辱れたく生存すれども彼是れ暇取た時ふは彼の武士を見失なはんも恐れ其の身宙を飛ぶ如くに跡を慕ひ蓬野の方へ向つて走り峯は堂といふ所へ来りしに此の裾には古き墓あり其の下にて以前の武士は用捨もなく彼の少年を取て押へ早くも首を掻切り古き塔婆の地輪に据て上たる錬衣の小袖にて刀を押拭ひ鞘に納め入れ踞をも云はず元来し道をさしは那方にあつたる堀へ投げ入れ踞をも云はず元来し道をさして引返す上人此の有様をつく〳〵と眺め潸然と涙流し上「アヽ後れたるお残念なり、今一足早くは何とか致して遂はさんに斯はありの姿を見ることの痛はしさよ我か心の通せず致して

此のまゝに帰り去るべきやうなしせめては後世を吊らひ度はさんと仮の首級を取り上け南無阿彌陀佛彌陀佛と他事なく吊らひ玉ひて居る所へ以前見たりし二人の女子恐もきれ〳〵汗を拭ふ恥け来りしが孫、も覺しき後れて出でたる女房上人の前へ置き玉ひたる首級を取り上げ、アヲ痛たしや情なき奴にはなり玉ひしぞ這は〳〵如何いたさん儲も不便の至りなりとヨヽ涙ぐみかりに法き伏し給ねも入りなん風情乳母と覺しき女房は堀の中に打込れし嬰孩はひ端にありしを抱き上げ、アヲ御痛はしや情なき御姿ふたり玉ひし如何に致して宜しからん是は夢か夢なら早く覺よかしと法き叫び目も當られぬ有様上人進み出で仔細を尋ぬれども聲しは惜も得云はず上人種々に数化して御命は限りある事に侍べり斬る憂目を見玉ふも前世の約束にてぞ候はん祈節愚僧参り合して後生をも吊らひまつるは同じ御事と云ひながら若君の善提も助かり玉ふちん一圓に絶ぬは思ひにてはべるなれど帰り玉ひて後世を吊らふとろ宜しからんと宜まへば女房は断々に頭を上げ女「御慈悲なる御洞燭しく侍る抑も此れ所は如何なる地にて候や上「されば法、は逢台野と申して古き人を送る島邊野なり偶々あるものは死人の屍草深ふして霧繁し、いふせく怪しき所なりと答へ玉ふ、女房はや、人心地つき女「北條とかいふ侍上り来り平家の子孫を矢なひ侍と聞にしなれど人の上、空も思へず憂目をや見んずらんや日頃は思ひ設けたり、されども愚かにも只今の事とは思ひ侍らず、斗を何者か云ひ傳へけん俄らに洲かり取られて最後の賜など進むる事ゆゑ懐かしく、いと情く儚げさへも見ずかき慈す別れの悲しきに心つゝに逃ひ出でたりつれど、ろとはかとも覺ねず元来西も東も知らぬ身にて候、之を思へば今朝花やかに

美くしかりける有様今斯くあるべしとは思ひ侍らず、何となるる事ぞやとて泣きくづをれてたはひなし、乳母の女房も共に泣くく涙を流し、哀れなり上人鬼角になぐきめ玉ひ、御身等なげき玉ふは尤もなれども此の上日も暮れたらんには世上騒がしき折ゆゑ盗人などいふ情なき者共出で来り如何なる憂目を見玉ふ早く返せ後世又獄類禁に出遇ひ玉はゞ如何なる憂目を見玉ふ早く返せ後世生死吊ら玉へかし女房は女「宿難き御詞には侍れども今は中々命を惜み申べき者にもあらず、玉の緒の消れは共に若君の御供をとゝ致すべし上「イヤ〳〵.

況ともものゝうなれども開は孫りに情なし婦人は五障三従とて罪深き御事にて候、御身等こそ悲しき地獄に落ち玉ふともいと惜き若君の邪魔の刃に失せ玉ひたるを御吊ら申さいで誰か後世を助け玉はん、一樹の影一河の流れも他生の縁、斯く申すも何かの御縁に候はんと心静か

にいさめられ二人の女房嬢しき事に候空御稚を申上しに上人も名乗せられて、若君の御事を尋れ是しに女房も恐る〳〵申すやう失せ玉ひたる公達とゝ本三位中将重衡卿の遺子にて候と申上る、上人聞し召れ、扨も世上中は恐ろしきもの、父なる卿の作り玉ひし罪の報ひ来りしならん、彼の君は大佛殿を焼奉つりいと恐ろしき罪業を造し玉ひし御方なり、夫とは是といひ、御身等二人りは頭を圓め彼の二君の後世を吊ら玉へかし女房大きに喜び上人に従ひ飾りを下し一生も諭し玉ふに

佛門に帰依いたし世を安らかに送られました、是と同じゝ様に嬢れた話といふは三位中将維盛の子に五代といふ方あり平家都を落し時北の方如何なる野の末山の奥までも御供を致きんとて従がひ奉つりし深く小倉山の麓菖蒲谷の北大覺寺と申す所に在せし事を早くも北條時政聞たへ出たる者あり、時政次の

日彼所に赴むき八方を圍み申入けるは、此の寺に三位中將殿の若君在ますと承たまはり時政御迎ひに推參好り、早々出たし候へと、云ふより早く座敷に武士龍み入り、驚ろき給ふ女房を引搦め奥代殿の花園へ出たり、此の時進み出でたる二人の侍我々は故中將殿に仕おひ奉つりし齋藤五、齋藤六と申する者に候狼籍をな致し給ふな一通り深を伺せられ候へ「されむ前に申しましたる如く、主人時政御迎ひに来りしぜゝ、早く渡し給はゝ宜し、さもなき時はみぢめや見んと已にも飛び掛らんの氣色、兄弟の者は何といふべき詞もなく、北の方は奥代君にヒシと縋り只今御渡し申し侍是は何日のほどにか帰るべき、妻を先に討ち玉ひて其の後連れ行申玉ふべしとてはつかな放す氣色もなし、乳母をはじめ餘の女房達は口〻とはかりに泣き伏す、此時奥代御前は御尋ねに他に移上始め一同の者ども決して嘆くべからず、斯

あらんとは兼ては覺悟に候ぞ、其方等もさまでに驚き候なと後き髮をかき揚げ ふさき黑水晶念珠を出だし爪繰り玉ひて御覺悟の様子、殊勝の体に北の方は金よ涙せきあへず北條の家臣等は御尤ともの御嘆申、痛はしくは存ずるといへどもいつまで斯てあり申そん、ハヤ御支度あられるやう時刻移り申た、イザ〳〵と急き立る、已む事を得ず若君は母上に向ひ、長らくの間御慈しみを賜はり嬉しく侍れ、御別れは盡き申さず、餘りに歎き給ひて御尊体を預れ給ふた、夫のみ心に掛り侍り、此は詞を聞給ふと金よむ世び給ひてあつたりしが齋藤五、齋藤六は進み出で「如何にや各々く方も物の哀れ既知り玉はん、先にも申する如く我々と若君の御先途を見届け奉つりたく相〻心得候何卒御供の義を御免し下さるべしとて涙に蔡れて申したり、郎黨共時政に斯くと申し入れは不授の者に思はれ差許きれしゆ為大いに喜と

び若君の乘り玉ひたる怪しげなる輿の左右に從おひ御供なす時政其の忠義を憐れみ耶蘇の馬を進むれども堅く辭して乘座ず妻夜寐食を安んぜず明日を殺されん、女べにや剃きれんとて足は破れ血汐流れて道の草を染るもいとはず殘り玉ひし北の方夜刃御前の御乘乳母の嘆きを思ひ日頃念ずる觀音薩陀の御利益を只管願み參らする

第十七席

法王夜刃御前は最愛の公達六代君に別れ乘つりしより寐食を安んぜず在しませしが乳母安房も如何とも慰さめる詞もなくそりとて此儘に差置き乘つらば御王の緒も如何に侍らんと繰やと心を苦しめ嘆や恐るまはりし文覺上人は事を申上げせめては後世を弔ひ乘るや否言葉を盡せし信實といひ且つ敵の上人は鎌倉どのゝ御覽にも目出度ければ萬に一つ御取成しを

願み六代君に苦痛を免し乘つらんとて乳母を連れて歩みも則ち山道を神護寺へ參望上人へ對し御目通りを願ひしに荒屋ら に障子を引開けづゝと立出でられしは七天餘りの大法師きつと睨まへ是は如何なる方にて候、此の府は女人禁制夫を辨まへて參られしかゝ〳〵下山致されるやう」聞玉ひたる夜刃御前は夜如何にや夫なるは嘆々聞き侍りし貴き聖僧にて渡らせられ候や、妾こそ乳の内より育て上げ參らせたる今年十二才になり玉ふ若君を昨日武士に捕られ侍りしなり、そすれば鎌倉へ引立られ定めし憂目や見つらんと曉野の雉子、夜の鶴子ゆゑの暗にまよひ侍り、あわれ聖僧の御情に縋かり苦艱を救ひ玉はれといふ中玉なす涙もせき敢へず聲を上てぞ泣き玉ふは他の見る目もあわれなり、上人承たまはり哀れを感ぜしが謀々ふ、勝はり妻のやゝ乳を尋れるに共に泣き居りし乳母を斷々起き上

り乳「是は小松三位中將殿の北の方にて在します、先にも北の方より聞に上し如く鎌倉武士傍若無人の擧動、よく澤をも踏添らず無理に引立參られ候文「ウーム、シテ誰とか申候ぞ、イヤサ其の大將は何者なるや乳「されはにて侍る、北條四郎時政とぞ承るまはり侍る文「ハヽア偖は時政にてありしか宜し〳〵聊か思ふ旨もあれば今日は大覺寺へ戻り我が便りを待ち玉へ惡きやらには致すまじ、餘り嘆きの強くして心はし狂はし玉ふな、乳の人とやら其方は今て心を附け候へ嚴と親切なる詞を聞き北の方乳人と共に上人を伏し拜み何卒して若君に今一度び見たきも玉へと別れを告げて戻り玉ふ、跡に殘りし文覺直孫文度を整へ北條四郎時政の宿所へ參り案内を通じけるに早速時政出で迎へ一間へ通し一別以來の挨拶畢り、時に上人文「扨御邊に御尋申度儀は此度平家の一門子や孫やに至るまで引立て參らせ

るよし、其中に三位中將維盛殿の惡男在するよしを承るまはつたり時「されは我れ等此の度鎌倉殿の厳命を蒙む諸所方々を尋ねしに中將は惡玉代といふ童子是れぞ平家の正統なれば漸々にして鎌倉へ引つ立て參らんと存ずる、實に其ぞしほど難儀なる役を賜はりし者はよもあるまじ、孫子の嘆きを見るにつけ我れ等も數多の子孫を持ち候へは分けて痛はしくて存ずれども君命止むを得ず、上入御賢察玉はれ文「イヤ御尤ともなる御詞シテ其の玉代殿とやらは此所にや在すらん一目見奉まつらんと存ず「ハヽア容易き事に候、アノ一室にとろ居玉ふと教へに上人障子を引明け入り玉ふ、那方の方ふ二重織物の直垂に黑き念孫を拵へ、上人の姿を見て念珠を懷ろに入れ、靨打赤めて居玉ひし、上人覺ずして〳〵と進み、よく〳〵見てあれは天のなせる美貌其の中に一種犯すべからざる威嚴を保つ、時に上人時政

に向ふ上「如何に北條氏、覺に愛らしき公達、御邊は是を矢なひ玉はんとするや、愚僧一目見奉せしより末の世まで鎌倉殿に憎まれ奉つるとも外に見捨ひ置くべき事叶ふまじと涙ぐみ玉ふ時、政岩木ふあられは同じく涙流めたり、此時上入再たび時政に向ひ文「愚僧此の若君を見奉つるに如何なる前世の宿縁にやいと惜く思ひ奉つれは鎌倉殿へ参り申受たく存ずる旅戮の義二十日の間待ち玉はるやう斯く申さは功に落るに似たれども鎌倉殿へは随分忠義を立し其孫にても助命を願はんと存ず時「如何にも御尤ともなる御詞後日御咎めはあるかは知らず二十日の間其し猶豫仕法らん、然らは御邊早く御下向候へ文「心得てとぎるとて涙々も云代君をいたはり附き侍ひし齋藤の兄弟によく〳〵此の事を申含め直ぐ出立をいたす、尤とも其の砌り北條へ頼み高雄山神護寺へ云代君を移し奉つり齋藤兄弟御供い

たし是も早に日頃念ずる観音菩薩の加護ならんとて上人の立ち玉ひしより日々観音経を読誦なし東の空を眺め指折り数て待つ中に月日に関守もなく已に二十日も満ぬんとする、然るに上人の訪れもあらざるにより北條殿より今は正むを事を得ず明日は東へ下向をするとて若君拝ひに齋藤兄弟に申し入れる、兄弟は心を砕き空といへども更に其の甲斐なく此段大覺寺へ参り夜刃御前乳母殿にも傳へし所御嘆きは以前に増り共に刃に伏し御供を致さんと他事なくいはれて留むる詞も出でず泣波羅へ法ふく立帰り北條時政に上人の訪ひを尋れしに更に無之趣むきゆえ茫然として居られ居り、そるほどに時政云代殿を倶し奉まつり以前は牢輿に乗せ出立なす、兄弟血の涙を流し輿の左右に従ひ足は破れて流れる血汐をいとはす都を跡に逢坂を越へ何日しか故郷の山も見はず大津の浦粟津ヶ原瀬多の唐橋打渡

り野路篠原も過ぎぬれば今日は鏡に着にけり、何處に旅寐といひながら母君や乳の母ふ別れ辛の歩みの道なれば如何に悲しく思し給ん翌朝當所を出立なし宿々國々を行き過ぎ唱名を與の内にて唱へ玉ふ、兄弟の者は文箱持ちたる者あれば叔父上人の御便りか又馬を早堂る者あれば急ぎ君を失ひ奉れとの鎧食の使ひにやあらんづらんと胸を痛める侍士共の密かに語る様子を見れば我が君を剃し奉つる相談や致すかと夕には濱に玉はん朝には玉の緒の繋ぎ留めし我嬉しく存じ泊りを重ね敷河の國千本松原へ来至し時、時政兄弟を呼び「如何に各々最早鎌倉も程近く候へば御身祭工入は都へ帰り玉へと承たまはる兄弟胸塞がり叔は此の所にて失なひ奉つる心得ならんと差俯向てあつたりしが頭を上げ、我々両人ころ長年の間変衣御側はらにあつて片時も離れ奉つらず、如何にも御先途を見届け奉

つるまで御免去玉はれと帯を惜まず叫びけり時「イヤ〳〵其し平家の人々迫公達を尋ね奉つり急ぎ失なひ候やら度々上意を敍むれども此の若君の事は上入も去りおたく申空れしゆ名今まで待ち候に御免のたき事と見は叔とろ延引いたすならん今は力及ぶべきにあらず各々も知る如く物束致せし時日は疾くに立ち是まで倶して参りしも若しや上人に御目にも掛らんかと存ぜしなり今一両日も日を経なば鎌倉へとろ入り申す、さある時は君命に背きし我が罪軽からず何事も前世の宿業と御諦らめ候へ世をも人をも怨み玉ふなや諭し又若君に向ひさま〳〵に申上げ最早御覺悟遊ばされ御心静かに御念佛候へと申けれは若君返事はなく黙首き玉ひ兄弟の者を召し宣ふは「如何に汝等今を限りにころあるべし是まで附き添ひ来りし志しのほど嬉しく存ずる母御前にも御文送らせたくは思へども筆の立て

所も無れは叶ひ申さず言葉にては変りし事なく鎌倉まで附き侍り、日数経るに従おひていとゝ人々の御幸慰しくとろ侍れと申せ必らず〳〵此の所にて失なはれたりと申すべき程ず餘りに嘆き玉ひ御身を破られぎるやう、便り少なき御身ゆゑ絶て心を附け慎れるやう返す〳〵も頼み侍る、兄弟此北御殿を承たまはり「ハヽウとはかりに泣き伏し御答へも出来ず頭も上げ得ぬ有様ふ、北條主従涙流し慰れて共にて失なひ奉まつらん と心得しも唯一人手を下す者もなく思ひ煩らふて居られたる然るに東の方より墨染の衣着たる僧、文袋を首に掛け月毛の馬に打乗り乗立て〳〵来られる、其の傍はらに後れじものをと一人の僧息続き〳〵走せ附けしが別人ならず馬に乗りしは文覺上人、附き従おひしは文明といふ弟子なり、近附くまゝに上人馬より飛び下り大者に過まちをし玉ふな北條殿、源二位殿の御

許し是なる御教書拝見あれとゝふより早く取出す時政謹しんで受取り披いて見れは鎌倉殿乃御自筆にて小松三位中將の惣代高雄上人頻りに申乞ふ間預け玉ふ處なりと高らかにとろ読み上たり兄弟は勿論手の舞ひ足乃踏どを忘るゝはかり、武士共も共に喜とびあへり、上人北條に向ひ文「愚僧鎌倉殿に深々愁訴いたし奉つり若君は御預り申したり、勿論鎌倉殿の上意ふ此の童は平家嫡々〳〵の正統にして父の中將とろ戒を打たんとて勅度の大將軍なり如何にも許しおたし我お身を平家助けしに依り斬く帝都に旗を立る場合になりしゆ、然程は行末を思ふ許しかたしと宣ひしを強て乞ひ申志愚僧方へ引取り法師にいたし奉つらん空て申上げ御許しに預かりしなり、時政共々ふ喜ひび今までの始末を物語り御別れ伏吾げ申す、實にや祖上の魚の再たび江條に移り、切下れ鶏の林鏡に交はるとは斯孫な時を申せ

しならん、云代御前夢現とも覺ぬれければ

消はずして頼む命にあられども

今朝まで露の身ぞ殘りけり

いと哀れにも聞とへければ時政侯を招ひ兄弟の者へ鞍置馬を下されさ上人に別れを告げ本つる、上人云代を連れ兄弟を供にいたし日數を經て正月五日二條猪熊の居に落ち着玉ひ旅の疲れを勞はり夜に入りて大藏寺を尋ね本つりけれども更に人影もなし、叔を餘りの嘆きに身など投げ玉ひつらん又は情なき武士の為に世を早く致空れしか、と心も心ならず在る時若君の日頃愛し玉ふ犬、雛の隙より走り出で尾を打ふりて迎よるを見て涙兄弟心を勵ましあれども北の方乳母を見ねば兎も角も其の夜は此の所に足を休め夫より長谷寺に御供なひ申し上しに本はひなる翁此所に北の方乳母と共に若君の御身恙なきやらにと祈せられて居られしゆ急ぎ御對面を願ひ其望日上人に御禮を申上げ且は師の坊を仰き餞りを下し父君はじ兄一門の方々の後生を吊らひ本つらんと高旗山へ赤られ上人に御目通りを致し戒を授あり何れも髮を下し墨染に姿を換に唱名念佛唱へて在せしお夫より年經て諸國の順拜を思ひ立ち習はぬ旅も唱名念佛、番れく廻り他事なく世を家ら空れる、實ふや文覺上人の聚動一ツとして感表ならざるはなく是れ則はち真の義俠とや申さん、先にも英々辨じましたる通り法殿の御情なき、姿を見本つりしより平家の無道を憎み深く苦心いたし世に立て本つり、後に云代殿の急難を救ひ平家の為に善提を吊ふす、又得おたき俠僧でおいま在上入其の終り孤高旗山に留めあられし事は歴然として明らかなる事にして猶此の外種々一世の中に御思語りも御座りま在

御丁數殊にしめ限りありまするゆゑ是にて結局と致します、疎漏社撰の廉安けれど取急ぎしまゝ看客よろしく御免し給ひまする

遠藤武者盛遠文覺實傳畢

明治廿九年七月十日印刷
明治廿九年七月十七日發行

講談者　東京市本所區相生町三丁目十八番地　祐植正一郎

發行者　東京市京橋區本材木町三丁目廿番地　服部嘉太郎

印刷者　東京市神田區鍋町廿四番地　横岡磯吉

印刷所　東京市日本橋區蛎殼町三丁目十一番地　行書專門　大島活版所

發行所　東京市京橋區本材木町三丁目廿番地　求光閣

版權所有